5-5　LMS・単位制・通信制等に関する制度的枠組みに関する文献調査　資料5

2025

LMS・単位制・通信制等に関する制度文献調査報告書

「通信制・単位制コース」を開講するための制度的・実務的条件

令和８年１月

学校法人ＹＩＣ学院

■目次

第１章　調査概要　P2
1.1 本調査の背景と目的
1.2 本調査の目的
1.3 本調査の位置づけと背景となる学校教育法等の改正について

第２章　教育システム基盤(LMS)を活用したサポート体制の項目に関する調査　P5
2.1 通信制学校におけるサポート体制の実態調査及びLMS導入に求められる必須条件について
2.2　通信制高校ホームページからみる実態調査結果　(2025年11月現在)
2.3 LMS(学習管理システム)における活用方法や将来トレンド予測について
2.4 LMS(学習管理システム)での生徒の学習管理と効果的に行うためには
2.5 専修学校における通信制コースの先行事例
2.6 専門学校が通信制高校の生徒に対して、または専門学校への入学が決まった生徒に対して入学前からLMS(学習管理システム)を連携・開放している事例について

第３章　単位制・カリキュラムに関する制度設計調査　P38
3.1 法令に基づく単位認定の要件(通信制専門学校における単位制と単位互換の法的整理)
3.1.2 単位互換に関する法的整理
3.2 単位の定義と学習活動の内訳
3.3　学習時間の内訳構成案
3.4　単位互換制度の活用

第４章　結論と今後の開発ロードマップ　P53
4.1 調査結果の総括と課題の特定
4.1.2　取り組み課題
4.2 開発ロードマップ(次段階へのアクションプラン)

第1章　調査概要

1.1 本調査の背景と目的

現代社会において、教育機関には、テクノロジーの進展や学習者の多様化に対応した柔軟かつ質の高い教育プログラムの提供が強く求められている。特に、デジタルトランスフォーメーション(DX)の波は教育分野にも及び、LMS(ラーニングマネジメントシステム)を活用した教育の効率化・高度化や、単位制・通信制の仕組みを最大限に利用した多様な学習機会の提供が、喫緊の課題となっている。

各専門学校におかれましても、今後の教育戦略を検討し、先進的な教育プログラムを設計するにあたり、これらの要素を制度的・法的な側面から深く理解することが不可欠である。LMS の導入や活用、既存の単位制・単位互換の枠組み、そして通信制高校や専門学校との連携可能性は、単なる教育手法の選択肢に留まらず、学校経営と教育の質を左右する重要な制度的条件となる。

このような背景を踏まえ、本報告書は、「LMS・単位制・通信制等に関する制度的枠組みに関する文献調査」の成果を取りまとめるものである。

1.2 本調査の目的

本調査の核心的な目的は、今後の教育プログラム設計に資するための制度的条件、論点、および活用可能な具体的な仕組みを、既存の法令や先行事例から明確に抽出することにある。

具体的には、以下の３つの柱に焦点を当てた文献調査を行う。

(1)教育システム基盤(LMS)を活用したサポート体制の項目に関する調査：LMS が単なるコンテンツ配信ツールに留まらず、学習評価や進捗管理を担うシステムとして機能するために、現行法規(学校教育法、各種設置基準など)が定める要件や、文部科学省等から示されているガイドライン(遠隔授業に関する規定など)がどのように適用されるのかを詳細に整理する。

(2)単位制・カリキュラムに関する制度設計調査：専門学校および高等教育機関における単位認定の枠組み、特に単位互換制度や既修等単位の認定に関する法的根拠と適用事例を調査し、教育連携を円滑に進めるための制度的・実務的な論点を明らかにする。

(3)通信制教育との制度的連携の可能性と実践事例：上記調査を通して、現状、通信制高校や大学との教育連携において、どのような制度的要件(教員、施設、授業時間など)が求められるのか、また、どのような教育実践事例が存在し、既存の教育プログラムにどのように応用可能かを探る。

1.3 本調査の位置づけと背景となる学校教育法等の改正について

本調査は令和６年度学校教育法等の改正を起因とし、新たに「通信制・単位制コース」の開講を目的とした調査を位置付ける。

「学校教育法等改正」とは、令和６年(2024年)６月に公布され、令和８年(2025年)４月１日に施行される、専修学校(特に専門学校)の制度を大きく見直す法律改正を指す。

この改正の主な目的は、社会の変化やニーズに対応するため、専修学校の専門課程を法制度上も高等教育機関として明確に位置づけ、その教育の質を向上させることにある。

令和８年４月１日施行予定の学校教育法等改正の内容と、それに関連する政策のポイントは以下の通りである。

学校教育法の一部を改正する法律案の概要

趣旨

専修学校は、学校教育法において、「職業若しくは実際生活に必要な能力を育成し、又は教養の向上を図ること」が目的とされ、医療福祉、工業等の分野において、実践的な職業教育機関として人材を輩出してきた。

人生100年時代やデジタル社会の進展の中で、職業に結びつく実践的な知識・技能・技術や資格の修得に向けて、リスキリング・リカレント教育を含めた**職業教育の重要性**が高まっていること等を踏まえ、**専修学校における教育の充実**を図るため、専門課程の入学資格を厳格化するとともに、専修学校における専攻科の設置に係る規定の創設、一定の要件を満たす専門課程の修了者への称号の付与、専門課程を置く専修学校への自己点検評価の義務付け等の措置を講ずる。

(1)法改正の目的と施行時期

法改正の目的は、専門学校(専修学校専門課程)が社会基盤を支える人材を輩出する実践的な職業教育機関としての重要性にかんがみ、法制度的にも高等教育機関であることを明確にすること、および他の高等教育機関との制度的整合性を図ることである。

大学等との制度的整合性を高めるための措置

① 専修学校の**専門課程の入学資格**について、**大学の入学資格と同様**の規定とする。【第125条関係】
※専門課程の入学資格について、高等学校等を卒業した者に「準ずる学力があると認められた者」から、高等学校等を卒業した者と「同等以上の学力があると認められた者」に改める。
※専修学校専門課程の在籍者の呼称を「生徒」から「学生」に改める。【第128条関係】

② 専修学校となるために**最低限必要な学習時間に関する基準**を、大学・高等専門学校と同様に「**単位数**」により定めることができるようにする。【第124条関係】

改正点と概要は以下の通りである。

No.	改正点	概要
1	入学資格と在籍者の呼称	入学資格を大学と同様の規定とし、在籍者の呼称を従来の「生徒」から「学生」に改める。
2	学習時間基準の単位制化	単位数によって修了要件を定めることができるようになります。今後は、専門課程は単位制に限定し、修了要件を「修業年限 × 31 単位以上」とする予定。
3	専門士の法定化と編入学資格	一定の要件を満たす課程を**「特定専門課程」**とし、修了者に「専門士」の称号を法律で付与する。 この修了者には大学への編入学資格が認められる。
4	専攻科の設置と大学院入学資格	特定専門課程を置く学校に、短大や高専と同様に専攻科を置くことができるようになる。文部科学大臣が認定する基準を満たした専攻科修了者には、大学院入学資格が付与される。
5	教育の質の保障の強化	大学と同等の項目での自己点検評価が義務化されます。また、外部評価（第三者評価）が努力義務とされる。

また、この法改正の背景には専門学校（専修学校専門課程）に対する以下の期待が込められている。

項目	概要
高等教育機関としての明確化	制度創設 50 周年を迎えるにあたり、実践的な職業教育を担う機関として、法制度上も高等教育機関としての位置づけを明確にすることを目指す。
地域産業中核人材の育成	地域の人手不足解消のため、専修学校が高い地元就職率を活かし、地域の人材ニーズを踏まえた教育を提供し、地方創生を支える役割を強化する。
多様な学習者の受け入れ	少子化や進学環境の変化に対応するため、高校卒業者だけでなく、留学生や社会人の受け入れ拡大が重要施策とされている。特に留学生の国内就職状況が改善している点が注目されている。

加えて、本改正は、専門学校が今後、地域の人材育成や社会人のリカレント教育など、高等教育機関としてより重要な役割を果たしていくための法的基盤を整備するものであり。**専門学校（専修学校専門課程）を法制度上も高等教育機関として明確に位置づけ、他の高等教育機関との制度的整合性を図ることを目的としている。**

第 2 章 教育システム基盤（LMS）を活用したサポート体制の項目に関する調査

本章は、教育システムを実現するための技術的な基盤（LMS）に関する調査結果をまとめる。
LMS に必要な機能リストを中心に、学習サポート体制としてどのような項目・機能が必要となるかについて、先行している通信制高等学校の状況について各学校サイトから調査結果をまとめる。

2.1 通信制学校におけるサポート体制の実態調査及び LMS 導入に求められる必須条件について

単位制、成績管理、学習ログ管理など、LMS に求める最小限の必須機能として何が必要となるかを洗い出し、最低限、現行の通信制高校の LMS の質的レベルを超えるものである必要がある。
通信制高校 58 校について調査し、データ分析からまとめていきたい。

加えて、学習サポート体制についてもICTを活用したしくみとして通信制高校の先行事例から高等教育としても必要とされる機能をまとめる。
通信制高校の事例については、各学校のホームページから判断できるものから判断となるためICT を活用したしくみを特色として打ち出しているかどうかに上って詳細がわかりにくいという限界と実際の生徒が活用するサイトのログイン案内の有無から判断する。よって、LST の詳細内容についてはオンライン配信ツール以上の学習評価や進捗管理を担うシステムとして機能としての活用の有無については、各校のホームページから判断するにには情報は十分ではない点をご了承いただきたい。

通信制高等学校の各学校サイトから主な学習サポートとしてどのような項目があるのか、主な分野として7つの分野サポートとその各分野のなかに具体的な機能をリストアップして、それらの有無を中心に調査項目を下記のとおり設定した。

<7つの分野>

1. **学習サポート機能**
   - ① 個別学習計画の作成と進捗管理
   - ② レポート添削・学習アドバイス
   - ③ オンライン授業・動画教材の提供
   - ④ 質問対応（対面・オンライン・チャットなど）
   - ⑤ スクーリング（面接授業）の案内・サポート

2. **メンタル・生活支援機能**
   - ① スクールカウンセラーによる相談体制

   - ② 生活リズム改善の支援
   - ③ 不登校・発達特性に応じた配慮
   - ④ 居場所づくり（校舎スペース・コミュニティスペース）

3. **コミュニケーション支援機能**
   - ① ホームルームや交流イベント
   - ② SNS トラブルや対人関係指導
   - ③ 少人数グループ活動の機会提供

4. **進路・キャリア支援機能**
   - ① 進路相談（大学・専門学校受験対策）
   - ② 就職支援（履歴書添削・面接練習・職場体験等）
   - ③ 得意・興味に応じた進路提案
   - ④ 高卒資格取得後の将来設計支援

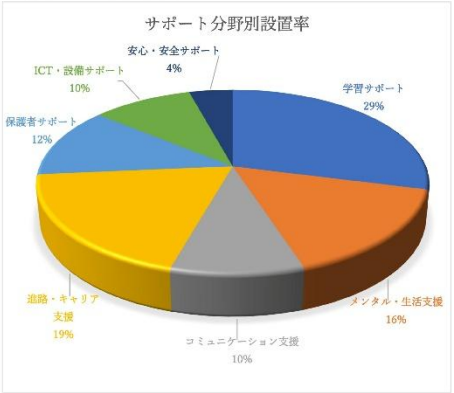
5. **保護者サポート機能**
   - ① 定期面談や学習状況レポート
   - ② 保護者向け説明会・相談窓口
   - ③ 家庭との連携による見守り体制

6. **ICT・設備サポート機能**
   - ① デバイス貸出や使い方指導
   - ② 学習管理システム（LMS）のサポート
   - ③ 通学可能なキャンパスやラウンジの整備

7. **安心・安全サポート機能**
   - ① 登校時・イベント時の見守り体制
   - ② いじめ・SNS トラブルの早期発見と対応
   - ③ 健康管理・危機対応（体調やメンタル不調への対応）

2.2 通信制高校ホームページからみる実態調査結果（2025 年 11 月現在）

調査数　58校（添付資料 ①）



通信制高等学校において、必要とされるサポート分野 7 分野について、各校が機能してホームページ記載の有無についての一覧である。
調査結果に基づき、その特徴を8点にまとめる。

（1）全体を通して見えてきた点として、ホームページでわかるのは、メディアミックスを工夫して生徒の学習支援を最新の ICT を活用している学校と、旧来のテキスト学習＋リポートースクーリングにリポート提出等でメールを活用程度の取り組みの二極化がある。このあたりは学校の規模や広域性の範囲によるところもあると推察される。テキスト・学習教材をメディアや動画を活用する場合、自校オリジナル教材の場合と、既存動画教材の活用の場合で導入に差がでている。このことによって、先行実施している学校のシステムを採用している場合、学習教材だけの場合とリポート提

出や学習管理のしくみまで活用している場合があるようである。

具体的には、学習媒体には①オンライン授業（動画配信コンテンツやライブ授業）－対面授業（スクーリング）｜実践学習｜テキスト ②動画配信｜対面授業（スクーリング）｜実践学習｜テキスト ③テキスト－対面授業（スクーリング）＋実践学習のパターン、以上3パターンがある。

また、質問への対応やリポート提出方法についても、チャット機能を活用してものから、メールなどを活用してものなど、かなり活用しているインフラに差があるように見える。このあたりは、LMSとしてどこまで学習支援面での活用が進んでいるかどうかについては、実態はかなり学校による差があるのではないかと推察される。

そこに、スタディサプリ、KADOKAWAとドワンゴが運営する「ネットの高校」、Zensutudy、I.ネットクラスルーム、クラークのWEBキャンパスなどを採用している学校もある。

(2)学習サポート分野の各項目の取り組み状況について



通信制高等学校の一番の特徴である学習サポートについては、学習教材や質問対応のオンライン化の導入に差があるものの、それ以外の機能のついては、8割は備えている。ホームページ上で詳しく記載されていないケースは数にカウントしていないが、ここについては、まず機能としては不可欠な項目といえる。

ただ、そこにLMSが仕組みとして整備されているかについては、Ⅰ整備されている、と判断するには学校による差があると思われる。別項目として LMS（学習管理システム）におけるデータ活用の先進事例については、改めて取り上げる。

(3)メンタル・生活支援分野の各項目の取り組み状況について



通信制高等学校において、何らかの状況で不登校になった生徒が再チャレンジする場となっている。そのため、不登校への配慮やカウンセリング体制については、様々な工夫をしていることが窺える。発達特性に応じた配慮など、医療的な視点も含めての配慮となるとホームページに明確に訴求はしていないが、大半のところで個別に相談すると対応できるようにメントがあるので、生徒個人の状況に応じて個別対応をするというアプローチはあるのではないかと判断できる。それを組織的に専任カウンセラーの配置や専門家の設置で対応しているかとなるとバラツキがあるように思われる。

(4)コミュニケーション支援分野の各項目について



通信制高等学校の場合、自分一人だけの孤独な学習になりがちで、かつ不登校などの事情で通信制を選択する生徒について対人関係について配慮をする機能は必要な機能である。

何らかの形で登校できるような工夫は大半で用意されている。特に、少人数グループ活動や担任制、ホームルームや交流できるイベントの工夫などがある。ただ、SNSトラブルなど個人のネットでの

交流関係まで明確に踏み込んで支援や指導をすることを明記しているところはまだ少ない。実際のコースとして、対人関係など社会での生活を支援する内容も含めて準備している学校があるので、この視点についてサポートするという視点は学校としては認識していると思われる。

また、Ⅰいじめ防止基本方針を学校として取り組み、明記している学校では、いじめの早期発見や解決に向けて積極的にかかわっていこうを意識はあると思われる。

(5)進路・キャリア支援分野の項目について



進路・キャリア支援の分野については、どこの学校においても丁寧な指導をしている項目の1つである。特に高校卒業資格取得とその後の進路としての大学・専門学校への進学やそれに向けての受験対策については、まず取り組む支援であり、卒業生の進路を考えると当然といえる。逆に通信制の特徴として、進学だけではなく広範囲に本人の得意・興味などに応じた

進路へのキャリア支援には進学以上に厚い支援に取り組んでいるのも特徴といえる。

通信制高等学校にはサポート校という制度で、専修学校・専門学校との協力体制をとっている学校も少なくない。その延長線に通信制専修学校の設置と考えると学習サポート体制、サポート校と連携していくことも円滑な取り組みになると思われる。この点については改めて先行事例について後述する。

(6)保護者サポート分野の項目について



保護者サポートの分野についても、通信制高等学校においては入学を検討する段階で問い合わせの多い分野である。保護者と学校スタッフとの間で生徒の状況を共通認識できるように定期的に連絡する体制と保護者からの直接相談窓口を明確にしているケースは半分以上の学校で整備されている。この数については、ホームページの記載からの判断で、保護者の声などを見ると体制としては、明記していなくても個別に柔軟にかつ丁寧で密なコミュニケーションが取れるようになっていると推察できる。このあたりも不登校などの事情を抱えながら再チャレンジで入学や転入をしてくる生徒が少なくないと考えると、家庭や保護者との関係については、重要なサポート支援機能と言えるであろう。

ルーティンとしてしくみとして連携している事例としては、LINEなどを活用して登校してきた日の様子を画像付きは投稿している学校もあった。何かトラブルがあった時だけに関わらず、通常の学校生活の様子や学習の進捗などについても共有する体制を維持しようとすると、何らかの LMS システムを活用して保護者とも共有情報を増やしていくことは、今後重要なしくみになることが考えられる。

(7)ICT・設備サポート支援分野の項目について



ICT・設備サポート分野の項目として、必ず必要とされるのが通学可能なキャンパスやラウンジなど場所の整備である。広域通信制の場合は、全国に学習センターやキャンパスなどを必須となる。このキャンパスやラウンジの有無が生徒数や広域からの入学につながっている。設備が本校などに周辺に偏っている場合、生徒が遠隔でスクーリングに通うためそれが障害となる。そういった学校は、通信制の学習媒体が従来型のテキストなどになっているように判断できるケースも多い。学習方法がオンラインも導入され、リポートや試験、進捗管理や様々の問い合わせなどサポートできる学習管理システム(LMS)の採否は、学校としての組織を拡大して上手な学習を両立させていくには不可欠な要素といえる。

その場合の学習ツールとして、デバイス(タブレット・PC・スマホ等)の貸出や使い方の指導についてもフォロー体制は必須となる。貸出についての言及はホームページをみる限りにおいては必ずしも高くはない、現状としては、登校するキャンパスやラウンジなどで、パソコンを使用できる環境については大半の学校で準備されている。生徒が登校しなくても自由にデバイスを使って学習できる体制については、全日制の学校でも普及していることを考えると通信制学校においては一層の普及が必要と考える。

合わせて、学費等の金銭的な支援についても、検討が必要な面と考えられる。

(8)安心・安全サポート分野の項目について



この分野についても設置の有無については、ホームページをみるだけでは明確に記載をしているとは言えない、ゆえにこの機能の設置の有無などが実態を表しているかどうかは１分判断できるとは言えないと考える。

特に、体調やメンタル不調への丁寧な対応という面については、コミュニケーション支援機能やメンタル支援の機能とも重なるが、特に健康面など医療的な視点も含めて総合的な対応を策定しているかということが重要な視点と考える。生徒に対して、担任やスタッフにカウンセラー、医師や養護支援など発達面の支援も含めてチーム制をとって対応するというところが一番丁寧なサポート体制であった。こちらでは登校やイベント時の見守り体制について、ホームページでの明記は見られないが、こちらについては先のチーム制や担任制、保護者との連携などが充分機能しているかどうかも問われていると考える。

メンタル・生活支援分野でも触れたが、「いじめやSNSトラブルの早期発見と対応体制について、問題意識の高い学校は「いじめ防止基本方針」を学校として策定し取り組んでいるとホームページ上で明記している。ここが単なる方針の策定にとどまらず、具体策として機能しているかが重要である。

2.3 LMS(学習管理システム)における活用方法や将来トレンド予測について

LMS(学習管理システム)における学習データの活用方法は多岐にわたる。
主な活用方法には、学習効果の測定、個別指導の最適化、コース内容の改善、そして将来的な学習トレンドの予測などが含まれる。
以下に具体的な活用方法を示す。

(1)学習状況と進捗の可視化

・リアルタイム追跡: 学生の学習時間、完了したモジュール、テストの点数などのデータをリアルタイムで収集し、進捗状況を把握できる。
・ダッシュボード: 教員や管理者が学習データを視覚的に確認できるよう、進捗状況を示すグラフや表形式のダッシュボードが提供される。

(2)個別学習とアダプティブラーニング

・学習のつまずき特定: LMSのデータ分析により、特定のトピックで多くの学習者が苦戦している箇所や、テストの誤答が多い問題を特定できる。
・個別フィードバック: 学習データに基づき、遅れている学習者への補足資料の提供や、進んでいる学習者へのより高度な課題の提案など、個別のサポートが可能になる。
・アダプティブラーニング: データ分析結果を用いて、学習者の習熟度や理解度に合わせて学習パスや教材が自動的に変化するシステムを実現できる。

(3) コースと教材の改善

・教材の有効性評価: どの教材が学習者の理解促進に効果的かをデータから判断し、効果の低い教材の差し替えや改善に役立てる。
・コース設計の見直し: データ分析を通じて、学習フローのボトルネックとなっている部分を発見し、コース全体の構成や順序を見直すことができる。

(4)成績評価とレポーティング

・効率的な成績管理: テスト結果や課題提出状況のデータを自動的に集計し、成績評価プロセスの効率化を図る。
・レポーティング: 保護者や管理者に対し、学習データに基づいた客観的な学習レポートを生成できる。

また、以下の情報活用により、教育の質を高め、学習者のエンゲージメント(学習意欲)向に貢献することが期待される。

(1)ラーニングアナリティクス (Learning Analytics: LA)

ラーニングアナリティクスとは、学習者の行動履歴や成績などのデータを収集・分析し、教育プロセスを理解・最適化することを目的とした学術分野および技術である。

【応用例】

・リスク予測と早期介入: 学習ログから「特定の課題の提出遅れが多い」「コース後半のコンテンツ閲覧が極端に少ない」といった兆候を察知し、学習の遅れやドロップアウト(脱落)のリスクが高い学習者を特定する。教員は早期にアラートを受け取り、個別にサポートできる。
・ エンゲージメント分析: 学習者がどのコンテンツに最も時間を費やしているか、フォーラムでの発言頻度などを分析し、学習への積極性(エンゲージメント)を評価する。

(2)学習ログ (Learning Logs / Educational Data Mining)

学習ログは、LMS内での学習者のあらゆる操作や行動を記録した生データ(ローデータ)のことである。クリック履歴、動画の再生時間、テストの回答時間、ディスカッションへの投稿内容などが含まれる。

【応用例】

・ 詳細な行動分析: どの動画のどの時点(秒単位)で再生が止まっているか、あるいは巻き戻されているかを分析することで、学習者がどの概念の理解に苦労しているかを正確に把握できる。
・ 学習パターンの発見: 優秀な成績を収めている学習者のログを分析し、彼らがどのような順序で、どのような教材を組み合わせて学習しているかを特定する。この成功パターンを他の学習者に推奨することで、学習効率の向上が期待できる。

(3)教育改善への応用

ラーニングアナリティクスと学習ログから得られた洞察は、具体的な教育改善アクションに直結する。

【応用例】

・カリキュラム・教材の最適化

・特定の単元のテスト正答率が極端に低い場合、その単元の教材が難しすぎる、または説明不足であると判断し、教材の修正や補足資料の追加を行う。
・閲覧されていない、または評価の低い教材を廃止・更新する。

・ 指導方法の改善:

・特定の時期に質問が集中する傾向があれば、その時期に合わせて教員やTA(ティーチングアシスタント)のサポート体制を強化する、あるいはライブ講義を設けるなどの対策を講じる。

・ 教育効果の定量的評価:

・新しい指導方法(例:反転授業の導入)を試行した際に、導入前後で学習ログや成績データがどのように変化したかを定量的に比較し、その効果を客観的に評価できる。

これらのデータ駆動型のアプローチにより、経験や勘に頼るだけでなく、科学的な根拠に基づいた教育の質の向上が可能となるであろう。

2.4 LMS(学習管理システム)での生徒の学習管理と効果的に行うためには

LMS(Learning Management System)を効果的に運用して学生の学習管理を行うには、学習状況が見える仕組み(**学習ダッシュボード**)と、学習を促すフィードバック・サポート体制の両方を整えることが重要となる。

「学習ダッシュボード」とは、学生の学習状況や生活に関するデータを集約し、グラフや表などによって、一目でわかるように可視化するシステムである。教員はこれを活用して個々の学生の理解度や進捗を把握し、より適切な指導や支援を迅速に行うことができる。学生自身が学習の進捗を確認し、自己調整学習を促すツールとしても利用される。

■主な機能と活用方法

①学習状況の可視化: 個々の学生の成績、学習時間、課題の取り組み状況などを追跡し、学業の進捗を評価する。

②生活面の情報管理: 出欠、アレルギー情報、日々のアンケート結果などの生活面データを学習データと統合し、多角的な状況把握を可能にする。

③教員による活用:

・クラス全体の傾向を把握し、授業の進め方や教材を改善する。
・学生の興味関心や課題を早期に発見し、個別指導や支援に活かす。
・分散していたデータを一元管理することで、公務を効率化し、学生との個別対応時間を増やすことを目指す。

④学生による活用:

・自身の学習計画が順調に進んでいるかを確認し、学習パターンを改善するために利用できる。
・自身の学習履歴をデータで確認することで、自己調整学習を促す。

⑤チームとしての活用:

・学校全体で情報を共有し、チームとして児童・学生を見守る体制を強化する。
・教員の経験とデータを組み合わせることで、より高度な支援を実現する。

以下に、LMSにおける学習管理のポイントを体系的にまとめる。

【学習管理のポイント】

① 目的に合わせたコース設計

- 学習目標を明確化(知識・技能・態度など)
- モジュール化された教材構成:章ごとに「動画 → 課題 → 小テスト → 振り返り」などのパターン化
- 学習の流れを可視化:進捗バー、学習マップを活用
  → 学生が「次に何をすればいいか」を迷わない状態を作る。

② 学習進捗の把握と分析

LMSの分析機能を活用して、以下について定期チェックを行う:

- ログイン頻度・受講時間
- 課題提出率・期限遵守状況
- 小テストの正答率・理解度
- 教材の閲覧状況

また、データからこれらの状況が分かるようにする:

- 学習が遅れている学生の早期発見
- つまずきが多い教材・問題の特定
- クラス全体の傾向(例えば「第3章の理解度が低い」など)

③ 早期介入(Early Intervention)

進捗が遅れた学生を放置しないことが重要です。

- 自動リマインド:締切前の通知、未閲覧教材のアラート
- 個別メッセージ:状況に応じて励ましや具体的アドバイス
- 面談・オンライン相談:必要に応じてフォローアップ

→ 早い段階のフォローがドロップアウト防止に効果的。

④ 多様な評価方法を組み合わせる

LMSはペーパーテストだけでなく、多面的な評価が可能。

- クイズ(自動採点):理解度チェックに最適

- レポート提出
- ディスカッション掲示板での発言を評価
- eポートフォリオで学習の振り返りを蓄積
- 動画提出・プレゼン資料などの実践的課題

評価方法の多様化は学習者のモチベーション維持につながる。

⑤ フィードバックの質を高める

- 即時フィードバック:自動採点テストで誤答理由を提示
- 教員によるコメント:具体的・改善点と長所を明記
- ルーブリック活用:評価基準を透明化し、学生も自己評価できるようにする

→ 効果的なフィードバックは学習改善の最も強力な要因。

⑥ 学習の主体性を促す設計

- 目標設定・振り返りシート等を定期的に利用する
- チェックリストで自己管理をおこなう
- 進捗をグラフで表示し、自己モニタリングを促す
- ゲーミフィケーション(バッジ、達成率表示など)

学生自身が「自分で学びを管理できる」状態を目指す。

⑦ コミュニケーションの活性化

- 掲示板・チャットで質問しやすい環境づくり
- フォーラムで学生同士のピアサポートを促す
- オンライン授業との組み合わせ(ハイブリッド型)
  → コミュニティ感は継続率を大きく上げる。

⑧ 運用の改善サイクル(PDCA)

- Plan:コース設計
- Do:LMS運用
- Check:ログ・成績・学生アンケート
- Act:教材改善、課題の見直し、運営方法の調整

■まとめ

効果的なLMS運用による学習管理は、

データで把握し　→ 早期に介入し　→ フィードバックで支え　→ 学習者の主体性を高める

という流れを作ることが必要である。

以下に 事例として Moodle に特化した運用フロー（テンプレート）を示す。Moodle の機能（コース、モジュール、活動、レポート、完了トラッキング等）を踏まえて構築してある。

【Moodle 運用フロー（テンプレート）】

① 事前準備フェーズ（コース開始前）

1. コースの基本設定
   - コースの作成（カテゴリ分類・コース概要記入）
   - コースフォーマット設定
     - トピック形式 / 週形式 の選択
     - セクションの数、表示形式の決定
   - 学習目標・到達目標をコース概要に記載
   - 学生の登録方法を設定（手動・自己登録・外部 DB）
2. 教材・活動の準備

Moodle の「活動」や「リソース」を配置：

   - ファイル（PDF/スライド）のアップロード
   - URL の設置
   - ページ、Book（電子テキスト）の作成
   - フォーラム（標準フォーラム、Q&A 形式）の設定
   - 課題（Assignment）の作成
   - 小テスト（Quiz）の問題バンク作成・問題登録
   - SCORM/動画教材 の配置
   - 出席機能（Attendance）の設定（必要に応じて）
3. 学習の流れを管理する機能の設定
   - 完了トラッキング（Activity completion）を設定
   - アクセス制限（Restrict access）を利用

     （例：前の課題を提出しないと次に進めない）
   - トピック・活動の自動公開日を設定

   - 成績表（Gradebook）のカテゴリ・配点を設定
4. 教員・学生への案内準備
   - コースの利用ガイド作成
   - Moodle の操作手順（課題提出・小テスト受験など）
   - 最初の週の「案内フォーラム」投稿内容を準備

② 運用フェーズ（コース開始後）

5. オリエンテーション実施
   - Moodle の基本操作を説明
   - コースの構造や評価方法を紹介
   - 最初の簡単な活動（アンケート・簡易クイズ）で Moodle に慣れてもらう
   - フォーラムへの自己紹介を促す
6. 毎週のコンテンツ公開運用
   - 週ごと／トピックごとに教材を公開（自動公開がおすすめ）
   - フォーラムで「説明」「学習のポイント」「お知らせ」を投稿
   - 次週の活動の準備（課題期限設定、問題の微調整など）
7. 学習進捗のモニタリング

Moodle の管理機能を活用：

   - レポート（活動完了・学習者ログ）を確認
   - 学習者の参加状況レポート（Course Participation）
   - 課題の未提出者・低得点者の抽出
   - 小テストの統計（易しい設問が多い問題）を確認

→ 進捗が遅い学生を早期に特定可能。

8. 早期介入（Early Intervention）
   - 提出遅れ者にフォーラムまたはメッセージでリマインド
   - 「通知」機能を使い締切前にアラート送信
   - 必要に応じて個別メッセージや面談
   - 出席（Attendance）で欠席が続く学生のフォロー
9. 学習サポート・コミュニケーション
   - フォーラムの質問に回答
   - Q&A フォーラムで学生同士の回答を促す

   - 毎週「振り返りアンケート（Feedback）」を作成し理解度チェック
   - TA・教員による週次メッセージ
10. 評価・フィードバック
    - 課題（Assignment）の採点
    - ルーブリック・チェックリストを活用したフィードバック
    - 小テスト（Quiz）の自動採点結果を確認
    - 成績表（Gradebook）の更新
    - コメント・添削の返却

③ 終了フェーズ（学期末）

11. 成績確定
    - Gradebook の集計確認
    - 全課題・小テスト・提出物の確認
    - 成績をエクスポート（CSV/Excel）
    - 不備や学習者からの問い合わせ対応
12. 振り返り・アンケート
    - Feedback モジュール でコース評価アンケート
    - 学習者のログ分析

      - どの活動がよく使われたか

      - どこで離脱が多かったか
    - 学習者の自己評価活動（Database / e ポートフォリオなど）

④ 改善フェーズ（次年度・次期）

13. コースの改善
    - 難易度の見直し
    - つまずきが多かった活動の改善
    - フォーラム投稿の質の分析
    - 追加教材の作成・差し替え
14. コースのバックアップと再利用
    - コースバックアップ機能（Backup）を実行
    - 次年度用として リストア（Restore）
    - 各期のテンプレート化（特に問題バンク）

    - 自動公開タイミングの調整

【参考】Moodle 運用フロー（チェックリスト版）

□ 事前準備
   - コース設定
   - 教材・活動登録
   - 完了トラッキング設定
   - 成績表の準備
   - 操作ガイド作成

□ 運用開始
   - オリエンテーション
   - 週次の教材公開
   - フォーラム運用

□ 進捗管理
   - ログ・活動完了の確認
   - 小テスト統計の確認
   - 遅延者・非参加者への介入

□ 評価・FB
   - 課題採点
   - 小テスト採点
   - フィードバック返却

□ 修了後
   - 成績確定
   - アンケート実施
   - コースバックアップ
   - 次年度改善

【参考】学習ダッシュボード設計例

以下に、LMS(特に Moodle)で利用できる「学習ダッシュボード」の設計例を示す。

実際の学校で使われている形式に近い形でまとめてある。

「学生向け」「教員向け」の 2 種類に分けて示す。

◆ 学習ダッシュボードの設計例(学生向け)

ポイント:

学生が「自分の現在地」「何をすべきか」「どのくらい遅れているか」を 一目で理解できること。

① 学習進捗サマリー(メイン表示)

- 現在の完了率(%)
- 今週のタスク数 / 完了タスク数
- 提出期限が近い課題(期限まで○日)
- 未読・未回答の活動(フォーラム、アンケート等)
- 次にやるべき 1 ステップ(Next Action)

② 学習活動の進捗状況(ユニット別)

ユニットごとに進捗を色分けで表示例:

- ◎ 完了済
- △ 一部完了
- × 未着手
- ⚠ 遅延(期限切れ)

表示する項目例:

- 動画視聴率
- 小テストの得点(円グラフ・棒グラフ)
- 課題提出状況
- フォーラム参加数

→「どの単元で遅れているか」がひと目でわかる。

③ 学習ログの可視化

- 学習時間の推移(週別・月別)
- 直近 7 日のログイン履歴(ログインした時刻)
- 活動の時間(動画視聴 80 分 / 課題作成 20 分など)

→ 自己管理能力の向上につながる。

④ 成績・フィードバックエリア

- 各課題・テストの得点一覧
- 達成度(配点に対する目標達成率)
- 教員からのコメント・添削
- ルーブリック評価の表示

⑤ コミュニケーション・サポート枠

- 教員からのメッセージ
- ピアサポート掲示板の新着
- 相談窓口(チャット・フォーム)

⑥ モチベーション維持の仕掛け(任意)

- バッジ・アチーブメント
- 学習連続日数(○日連続学習中)
- 目標設定と達成チェックリスト
- 他の学習者の平均進捗(匿名)
-

◆ 学習ダッシュボードの設計例(教員向け)

ポイント:「どの学生が遅れているか」「どこが難しいか」「全体の理解度」をすぐに把握すること。

① クラス全体のサマリー

- 全体の平均完了率
- 小テスト平均点
- 課題提出率
- 期限切れ提出数
- 欠席・未ログイン人数(過去 7 日)

② 学習者別進捗リスト(危険度順)

学生名	進捗率	最終ログイン	課題未提出数	小テスト平均	アラート
A さん	92%	昨日	0	85 点	-
B さん	45%	5 日前	3	52 点	⚠ 介入必要

アラート条件例:

- 7 日以上ログインなし
- 課題未提出が 2 件以上
- 小テスト平均が一定以下

③ 活動別の学習状況 教材の改善ポイントが見える化 される。

- 動画視聴率の分布図
- 小テストの誤答率 TOP10
- 課題提出の締切遵守率
- フォーラム発言数の分布(アクティブ/消極的)

④ コース改善用データ

- つまずきの多いセクション(遅延者が多い箇所)
- 小テストのアイテム分析(区別力・難易度)
- エラーが多い操作(ログイン失敗, 動画未再生 等)

⑤ 介入ツール

- 遅れている学生への一括メッセージ
- 個別コメント・フォローアップ
- リマインダー(自動 / 手動)設定
- メンタリング対象者の記録(メモ機能)

【参考】Moodle 配置例

学生向けダッシュボード:

- 「マイホーム」「学習進度」"完了トラッキング」ウィジェット
- Custom Reports(Moodle Analytics)で学習状況表示
- ブロック:「最近のアクティビティ」"コース概況」「Learning Plan」

教員向けダッシュボード:

- Course reports(参加状況 / 活動完了 / ログ)
- Gradebook と Analytics
- ブロック:「学習者レポート」「予定」「メッセージ」
- Configurable reports を使うとカスタム表を追加可能

シラバス事例

LMS シラバス事例②:通信制・単位制向け(到達基準明確型)

科目シラバス(到達基準ベース)

科目名 キャリアデザイン I

学習の進め方

- LMS 上の「①動画視聴 → ②確認テスト → ③課題提出」で 1 単元修了
- 全 8 単元を修了すると単位認定対象

単元構成

単元	学習内容	修了条件
1	自己理解	テスト 80%以上
2	興味・適性	ワーク提出
3	職業調査	レポート
…	…	…
8	将来計画	最終課題

単位認定要件(LMS 明示) 「何を行えば単位が出るか」を LMS 上で明確化する必要がある。

- 全動画の視聴完了(LMS ログ)
- 確認テスト合格
- 課題提出率 100%

2.5 専修学校における通信制コースの先行事例

専修学校の通信制（単位制通信教育）は、学習者の多様なニーズに対応するために重要な教育形態であるが、先行事例としてインターネットで詳細なコース内容や学校名を具体的に公表しているケースはすくなく、特に、「専修学校」として通信制コースを開設している先行事例は、通信制高校」や「高等専修学校（通信制）」の事例に比べて情報が少なく、個別の学校の事例を見つけるのは難しい状況にあった。

そのため、「通信制」の成功の鍵となる教育手法や、関連分野の事例を紹介する。

■先行事例から学ぶ成功のポイント

専修学校が単位制通信教育を成功させるためには、以下の要素が先行事例やｅラーニングの専門家によって指摘されている。

（1）ｅラーニング（ICT 活用）の徹底

先行事例の多くは、通信教育におけるｅラーニングの活用を成功の鍵としている。

改善サイクルを速く回す：ｅラーニングシステムは、成功するまでに３回はバージョンアップが必要であると言われている。いち早く導入し、学習者のフィードバックに基づいて改善のサイクルを速く回すことが、教育効果を高める最短コースとされている。

最新テクノロジーの活用：成人教育学に基づき、最新のｅラーニングテクノロジーを活用することで、教育効果を飛躍的に跳ね上げることが可能とされている。

(2) 教育内容とターゲット層の明確化

専修学校の通信制は、通学制と同じ専攻分野で、かつ通信教育でも十分な教育効果が得られる分野に限定される。

地域資源の活用：文部科学省の資料でも、地域資源を活用した観光振興など、地域に根ざした専門知識を通信制で提供する可能性が示唆されている（例：ニューツーリズム）。

スキルアップ・リカレント教育：社会人のキャリアチェンジやスキルアップを目的としたコースは、時間や場所の制約を受けにくい通信制との親和性が高い。

(3) 参考となる先行事例の形態

具体的な「専修学校・通信制」の事例を見つけるのが困難なため、ここでは教育の形態が類似している先行事例として、特に成功している分野を参考として紹介する。

①通信制大学・大学院

【特徴】既に単位制・通信制のノウハウを確立しており、社会人や遠隔地の学生を対象にした教育手法、特にｅラーニングや対面授業（スクーリング）の実施方法について、最も参考になる先行事例である。

【学ぶべき点】

オンライン教材の質：印刷教材とｅラーニングコンテンツの構成。

スクーリング（面接指導）の設計：必須の対面授業（年間 120 単位時間以上）を、短期間で集中的に行う方法や、地方サテライト施設での開催方法。

②医療・福祉分野の通信制教育

【特徴】介護福祉士や社会福祉士などの国家資格を目指す課程では、通信制が古くから存在している。これは専門学校の通信制と同じく、厳格な実習・実技が必須であるという点で参考になる。

【学ぶべき点】

実習指導の仕組み：通信での理論学習と、提携施設での実習を組み合わせる際の、学校側の指導体制や評価基準。

③通信制高等専修学校（高等教育レベル）

【特徴】専修学校の中でも、高校卒業資格を得るための通信制高等専修学校（または通信制高校との連携）は、不登校経験者など多様な学習歴を持つ生徒への対応ノウハウが蓄積されている。

【学ぶべき点】

個別の学習サポート：添削指導や教育相談を円滑に行うための組織体制。

柔軟な単位認定：学習者のペースに合わせた単位の修得方法や進級・卒業要件。

次項で通信制高校の事例を示す。

2.6 専門学校が通信制高校の生徒に対して、または専門学校への入学が決まった生徒に対して入学前から LMS（学習管理システム）を連携・開放している事例について

専門学校が通信制高校の生徒に対して、または専門学校への入学が決まった生徒に対して入学前から LMS（学習管理システム）を連携・開放している事例は以下の通りである。

特に、通信制高校と専門学校が「同じ教育グループ」に属している場合や、「技能連携」を結んでいる場合において、この仕組みは非常に活発である。

主な３つの連携パターンと、具体的な事例を整理した。

(1) 同一教育グループ内での LMS・コンテンツ共有

最もLMS連携が進んでいるのがこのパターンである。同じ運営母体が「通信制高校」と「専門学校」の両方を持っている場合、高校生のうちから専門学校の LMS やオンデマンド教材（ｅラーニング）にアクセスできる仕組みが整っている。

教育グループ	通信制高校	連携する専門学校・LMS の活用
ヒューマンアカデミー	ヒューマンキャンパス高等学校	**【事例】**高校在学中から、専門校（ヒューマンアカデミー）の専門授業（声優、メイク、IT など）を LMS やオンラインで受講可能。専門校の講師による映像教材が共有されており、高校の単位としても認定される仕組みがある。
バンタン（KADOKAWA グループ）	バンタン高等学院	**【事例】**高校卒業資格を取りながら、専門スクール（バンタン）と同じ校舎・同じ講師・同じ教材（動画教材含む）を使用。実質的に高校生が専門学校の LMS 環境で学んでいるのに近い状態である。
三幸学園	飛鳥未来高等学校	**【事例】**グループ内の美容・医療・スポーツ系専門学校の授業を体験・受講できるプログラムがあり、独自の学習アプリや LMS を通じて連絡や課題提出を行うケースがある。

(2)「技能連携制度」による LMS 利用

通信制高校の生徒が、提携先の専門学校（高等課程や専門課程）の科目を履修することで、高校の卒業単位として認められる制度。

- **仕組み：**生徒は高校に在籍しながら、専門学校の LMS（Google Classroom、manaba、独自システムなど）のアカウントを付与され、そこで課題提出や動画視聴を行っている。
- **事例：**多くの「技能連携校」指定を受けている専門学校が、提携する通信制高校（例：クラーク記念国際、星槎国際など）の生徒向けに、LMS 経由でレポート課題の配信を行っている。

(3) AO 入試・推薦合格者向けの「入学前教育」としての LMS を開放するケース

これは「高校と専門学校の提携」というよりは、専門学校に入学が決まった高校生（入学予定者）に対して、４月の入学までの半年間ほど LMS を開放するケースである。

近年、この形式が急増している。

- **目的：**入学までのモチベーション維持、基礎学力の底上げ、中退防止。
- **使われるツール：**
- Google Classroom / Slack：課題の配信や、先輩・教員とのコミュニケーション。
- Moodle / manaba：大学・専門学校で一般的な LMS。ドリル形式の課題や映像授業を配信。
- Pholly（フォリー）/ Classi：入学前教育に特化したプランとして導入する学校が増えている。
- **具体的な流れ：**
    1. **合格通知：**AO 入試などで合格（秋頃）。
    2. **ID 発行：**専門学校の LMS アカウントが発行される。
    3. **プレ授業：**入学前に「解剖学の基礎（医療系）」や「デッサンの基礎動画（デザイン系）」などをスマホで視聴・提出。
    4. **入学：**スムーズに専門授業へ移行。

■具体的な導入が確認されている分野・学校例

特定の学校名が公表されていないケースもあるが、以下の分野では LMS を使った入学前教育（プレカレッジ）が一般的。

- **IT・情報系専門学校（HAL、ECC コンピュータなど）：**プログラミングの基礎を入学前から触らせる。
- **医療・看護系：**生物や数学の基礎復習ドリルをｅラーニングで実施。
- **デザイン・アニメ系：**動画教材の視聴 URL を限定公開で共有。

■まとめ

「入学前からの LMS 連携」は、特に大手教育グループ（ヒューマン、三幸、KADOKAWA など）で

システム化されている。

とくに IT 分野は、教材がデジタル（プログラミングコードやソフトウェア操作）であるため、他分野に比べて圧倒的に LMS 連携やオンライン連携が進んでいる領域である。

IT 系の専門学校と通信制高校の連携、および入学前教育における LMS 活用事例を具体的に解説する。

(1)【先進事例】KADOKAWA・ドワンゴグループ（N 高・S 高 × バンタン）

ここは「LMS そのもの」を共通プラットフォームとして開発・運用している最も先進的な事例である。

- 連携校：N 高等学校・S 高等学校 ⇔ バンタン（テックフォードアカデミーなど）
- 使用 LMS：N 予備校（N Yobi）
- 連携の内容：
  - 共通プラットフォーム：「N 予備校」というアプリ/LMS が共通基盤。
  - コンテンツ共有：通信制高校（N 高）の生徒も、専門スクール（バンタン）の生徒も、同じプログラミング講座（Web アプリ開発、Unity、ゲーム動画風アプリ作成など）にアクセス可能。
  - 双方向性：動画を見るだけでなく、コードを書いて提出し、自動採点やエンジニア講師からのフィードバックを受ける機能が LMS 内に統合されている。
  -

(2)【グループ連携】ヒューマンアカデミー（IT カレッジ）

全国展開しているヒューマンアカデミーも、グループ内の高校生に対して専門教育を開放している。

- 連携校：ヒューマンキャンパス高等学校 ⇔ ヒューマンアカデミー（IT カレッジ）
- 連携の内容：
  - 高校の「専門コース」を選択すると、専門学校の校舎で授業を受けるスタイルが基本だが、「AI・IoT・ロボット」などの分野では、自宅学習用に e ラーニングシステムが提供されている。
  - 入学前の高校生に対し、専門学校側が使用している映像教材の一部を LMS 経由で視聴させ、職業理解を深めさせる取り組みがある。

(3)【入学前教育】HAL・ECC・TECH.C. などの大手 IT 専門学校

これらは「高校との提携」というより、"AO 入試などで合格した高校生（入学予定者）"に対して、入

学の半年ほど前から LMS を開放するケース。IT 分野ではこれがスタンダードになりつつある。

学校例	目的・内容	使用されるツール/LMS の傾向
HAL（東京・大阪・名古屋）	**「プレスクール」での基礎力向上** 入学後に挫折しないよう、C 言語の基礎や IT パスポートレベルの知識を e ラーニングで学習させている。	独自のポータルサイトや、Moodle 等の LMS 上で課題配信・提出を行う。
ECC コンピュータ専門学校	**「入学前特別授業」のオンライン化** 遠方の高校生も多いため、LMS での動画配信や課題提出に加え、Google Meet 等でのライブ授業を組み合わせる。	Google Classroom、または学校独自の LMS を使用。
TECH.C.（東京デザインテクノロジー）	**My スクール（プレ講義）** 入学前から業界知識をインプットするための動画教材配信や、SNS ツールを使った先輩との交流。	独自のアプリや、LINE、Discord などを LMS 的に活用してコミュニティ形成を行う。

(4) IT 分野特有の「LMS 連携」の形態

IT 分野では、一般的な「講義動画を見る LMS（Moodle など）」に加え、**エンジニアの実務に近いツール**を LMS の一部として入学前から触らせる事例が増えている。

- **Paiza（パイザ）等の学習プラットフォーム連携：**
  - 学校独自の LMS を作るのではなく、プログラミング学習サービス（Paiza ラーニング学校（フリーパスなど）のアカウントを高校生に配布し、「入学までにランク C までクリアしておくこと」といった課題を出す学校が増えている。
- **Discord / Slack の活用：**
  - IT 系では、LMS の「掲示板機能」を使わず、Discord や Slack を入学前から招待し、そこで技術的な質問対応や課題提出の連絡を行わせるケースが非常に多い。
- **GitHub Education：**
  - 一部のハイレベルな連携コースでは、入学前から GitHub のアカウントを作らせ、コードの提出（Push）を行わせる事例もある。

■まとめ：IT 分野の導入フロー

IT 系の専門学校では、**「入学してからゼロから教える」のでは遅い**という危機感があるため、以下のようなフローが定着している。

1. **高 3 秋：** AO 合格決定。
2. **ID 配布：** LMS のアカウント付与。
3. **10 月〜3 月：**
   - 「タイピング練習」
   - 「IT パスポート基礎用語」
   - 「HTML/CSS の基礎」
   - これらを自宅で行い、進捗を学校側が管理する。
4. **4 月 入学：** 基礎ができた状態でスタートする。

■自校で導入する場合の注意点

専門学校が通信制高校との連携や入学前教育（プレカレッジ）のために LMS を導入する場合、「機能の多さ」よりも「離脱させない（ログインし続けさせる）工夫」が最重要課題になる。

高校生（特に入学前の生徒）は、まだ正式な学生ではないため、少しでも「使いにくい」「面倒」と感じるとすぐにログインしなくなりやすい点を注意しなければならない。

■自校で導入検討する際の「システム選定」と「運用設計」の重要ポイントを以下に整理する。

(1) システム選定のポイント：3 つの選択肢と判断基準

「予算」と「IT リテラシー（生徒・教職員）」のバランスで決定する。

パターン	具体的なツール例	向いている学校・状況	注意点（デメリット）
A. プラットフォーム型（手軽・安価）	Google Classroom Microsoft Teams	・コストを抑えたい ・教員が使い慣れている ・課題提出や連絡がメイン	・「学習進捗の細かい分析（動画をどこまで見たか等）」が弱い。 ・学校っぽさが強く、生徒のワクワク感は低い。
B. 学習管理特化型	Moodle（要構築）	・大学/専門学校として本格的な LMS が必要	・導入/ランニングコストが高い。 ・UI が少し堅苦しく、スマホで使い

パターン	具体的なツール例	向いている学校・状況	注意点（デメリット）
（機能重視）	manaba Canvas	・テストの自動採点や詳細なログ分析をしたい	にくい場合がある。
C. コミュニケーション重視型（エンゲージメント重視）	Classi Studyplus for School EdPortal	・**「学習」より「モチベーション維持」を優先したい** ・高校ですでに導入されているツールに合わせる	・専門的な技術課題（コード提出や大容量ファイル）には向かない。 ・月額コストがかかる。

【最重要チェックポイント】

- **スマホ・アプリの UI（使い勝手）：** 生徒の 99%はスマホでアクセスすると考えてよいであろう。「PC 画面を無理やりスマホで表示するタイプ」の LMS は、確実に使われなくなる。専用アプリがあるか、スマホブラウザでサクサク動くかを確認しなければならない。

(2) 運用設計のポイント：挫折させない「4 つの壁」対策

システムを決めた後、どう運用するかが成功の鍵。よくある失敗パターン（壁）への対策を事前に決めておく必要がある。

①「ID・パスワード」の壁（ログインできない問題）

- **課題：** 郵送で ID を送っても、入力ミスや紛失でログインできず、そのまま放置される。
- **対策：**
  - 可能なら **LINE 連携**や **QR コードログイン**ができるシステムを選ぶ。
  - または、初回ログイン説明会を Zoom や対面で実施し、その場でログインさせる。

②「コンテンツ量」の壁（学習量が多すぎて挫折する問題）

- **課題：** 90 分の授業動画をそのまま置いても、高校生に絶対に見ない。
- **対策：**
  - **マイクロラーニング化：** 動画は 1 本「5 分〜10 分以内」にする。
  - TikTok や YouTube Shorts 世代に合わせ、要点だけを短く伝える構成にする。

③「孤独」の壁（反応がなくて飽きる問題）

- **課題：** 課題を出してもフィードバックがないと、モチベーションが下がり、入学意欲減退（辞

誤）につながるリスクがある。

- **対策：**
  - **双方向性：** 自動採点だけでなく、コメント機能や「いいね」機能を使う。
  - **メンター制度：** 在校生（先輩）をLMS上のサポーターとして配置し、軽い質問に答えてあげる体制を作る。

④「高校側のカリキュラム」との壁（忙しすぎる問題）

- **課題：** 通信制高校のレポート提出時期（特に学期末）と、専門学校の課題が重なるとパンクする。
- **対策：**
  - 高校側の年間スケジュールを把握し、**"課題を出さない期間（ブラックアウト期間）"**を設定する。
  - 「必修（マスト）」と「任意（ベター）」の課題を明確に分ける。

(3) IT 系専門学校としての推奨構成案の事例

IT 分野であれば、既存のLMSにこだわらず、業界標準ツールを組み合わせるのが最も効果的で、かつ生徒の満足度も高くなる。

- **メイン連絡・コミュニティ：** Discord または Slack
  - 理由：IT 業界の標準ツールに慣れさせる。スマホ通知も優秀で、反応率がメールの比ではない。
- **教材・課題提出：** Google Classroom または Github Classroom
  - 理由：無料で使える。Github を使えば、ポートフォリオとして残る。
- **学習コンテンツ：** Udemy 法人プラン や Progate 等の外部サービス契約
  - 理由：自前で教材動画を作るコストを削減し、質の高い教材を提供できる。

■まとめ：次にすべきこと

もし、具体的な導入を検討されている段階であれば、以下のどちらのアプローチから始めるかを決めるのが良いであろう。

①「既存ツール活用」コース： すでに校内で使っている Google Workspace や Microsoft 365 をどうカスタマイズすれば入学前教育に使えるか設計する。

②「専用ツール導入」コース： 予算を確保したうえで、ベンダーに見積もりを取り、デモ画面をスマホで触ってみる。

まずは「対象となる生徒数（入学予定者数）」と「教員が運用に割けるリソース（誰が管理するか）」を整理することが重要である。

その際、自校のリソース状況がポイントとなる。専任担当が置けるか、兼任になるか等の検討が必要である。

第 3 章　単位制・カリキュラムに関する制度設計調査

本章は、法令を遵守し、教育目標を達成するための単位制の設計方針をまとめる。

3.1 法令に基づく単位認定の要件（通信制専門学校における単位制と単位互換の法的整理）

通信制の専門学校（専修学校専門課程）における単位制の導入と単位互換については、主に学校教育法とその関連法令等に基づき制度化・整理されている。

3.1.1 単位制に関する法的整理

(1) 法的根拠

専修学校は、学校教育法第 124 条に基づき設置される教育機関である。

> 第 124 条　第 1 条に掲げるもの以外の教育施設で、職業若しくは実際生活に必要な能力を育成し、又は教養の向上を図ることを目的として次の各号に該当する組織的な教育を行うもの（当該教育を行うにつき他の法律に特別の規定があるもの及び我が国に居住する外国人を専ら対象とするものを除く。）は、専修学校とする。
> 一　修業年限が 1 年以上であること。
> 二　授業時数が文部科学大臣の定める授業時数以上であること。
> 三　教育を受ける者が常時 40 人以上であること。

通信制の学科を置くこと、および単位制の導入は、文部科学省の告示や通知により制度化されている。

専修学校の専門課程では、従来の授業時間数に基づく修了要件に加え、単位制による学科を設けることが可能。特に通信制の学科においては、授業時数ではなく単位数により修了の基準（総単位数）を定めることとされている。（学校教育法施行規則と専修学校設置基準）に上って定められている。

> 学校教育法施行規則　第 186 条第 1 項第 2 号：通信制の学科の修了要件として、授業時数ではなく総単位数が基準として定められている。
> 専修学校設置基準　第 17 条（改正後）：昼間学科及び夜間等学科における全課程の修了要件について、従来の授業時数に加え、単位制を選択できるよう規定されている。
> 専修学校設置基準　第 29 条（改正後）：通信制の学科における対面授業の授業時数について定めており、専門課程の場合は修業年限に応じた単位時間数（総授業時間数）が定められている。

通信制の学科の新設は、目的の変更に当たるため、所轄庁への認可が必要となる。（学校教育法第 130 条、第 131 条）。

> 第 130 条　国又は都道府県（都道府県が単独で又は他の地方公共団体と共同して設立する公立大学法人を含む。）が設置する専修学校を除くほか、専修学校の設置廃止（高等課程、専門課程又は一般課程の設置廃止を含む。）、設置者の変更及び目的の変更は、市町村の設置する専修学校にあつては都道府県の教育委員会、私立の専修学校にあつては都道府県知事の認可を受けなければならない。
>
> 2　都道府県の教育委員会又は都道府県知事は、専修学校の設置（高等課程、専門課程又は一般課程の設置を含む。）の認可の申請があつたときは、申請の内容が第 124 条、第 125 条及び前二条の基準に適合するかどうかを審査した上で、認可に関する処分をしなければならない。
>
> 3　前項の規定は、専修学校の設置者の変更及び目的の変更の認可の申請があつた場合について準用する。
>
> 4　都道府県の教育委員会又は都道府県知事は、第 1 項の認可をしない処分をするときは、理由を付した書面をもつて申請者にその旨を通知しなければならない。

> 第 131 条　国又は都道府県（都道府県が単独で又は他の地方公共団体と共同して設立する公立大学法人を含む。）が設置する専修学校を除くほか、専修学校の設置者は、その設置する専修学校の名称、位置又は学則を変更しようとするときその他政令で定める場合に該当するときは、市町村の設置する専修学校にあつては都道府県の教育委員会に、私立の専修学校にあつては都道府県知事に届け出なければならない。

(2) 単位認定の柔軟性

単位制を導入することで、一定の授業時間数の履修だけでなく、専修学校教育の特性を踏まえた適切な方法で学修成果を評価し、単位を付与することが可能になる。

専修学校の生徒以外の者が、正規課程の授業科目を履修し、後に単位制の学科に入学した場合、入学前に修得した単位を当該専修学校の単位とみなし、付与することが認められている。

3.1.2 単位互換に関する法的整理

(1)法的根拠と目的

単位互換は、主に専修学校と大学等の他の高等教育機関との間の学生の移動を円滑化し、多様な学習機会を提供することを目的としている。

単位制の導入は、大学との単位互換や、専修学校専門課程から大学へ編入学した際の学修成果の換算を容易にするための基盤となる。

(2)単位互換の制度

専修学校と大学との間の単位互換については、大学の学則で定めることにより、大学が他の大学や専修学校専門課程における学修を、卒業要件として定める単位の一部として認めることが可能、(（大学設置基準(昭和三十一年文部省令第二十八号)。

> (大学以外の教育施設等における学修)
> 第二十九条　大学は、教育上有益と認めるときは、学生が行う短期大学又は高等専門学校の専攻科における学修その他文部科学大臣が別に定める学修を、当該大学における授業科目の履修とみなし、大学の定めるところにより単位を与えることができる。
> 2　前項により与えることができる単位数は、前条第一項及び第二項により当該大学において修得したものとみなす単位数と合わせて六十単位を超えないものと

この制度により、学生は一度修得した単位を再度取得する必要がなくなる。

ただし、単位互換の認定は受け入れる側の学校の判断に委ねられており、すべての単位が無条件に認められるわけではない。認定の可否や上限単位数は、各学校の学則や定めるところによる。

3.2 単位の定義と学習活動の内訳

専門学校(専修学校専門課程)の設置基準における「通信制課程」には、全日制とは異なる特例的な計算方法や運用ルールが定められている。

特に重要な「単位認定の学習時間」と「スクーリング(面接授業)の要件」、および メディア授業(eラーニング等)による特例」は以下の通りである。

(1)単位認定の基本概念(45 時間の原則)

まず、専門学校における「1 単位」の定義は、全日制・通信制を問わず以下の原則に基づく。

1 単位 ＝ 45 時間の学習通信制においては、この 45 時間を以下の 3 つの要素の組み合わせで構成する。

① 印刷教材等による自学自習(テキスト学習)

② 添削指導(レポート提出・課題)

③ 面接授業(スクーリング)

(2)スクーリング(面接授業)の必須要件

通信制であっても、全てを自宅学習で完結させることはできず、一定時間の「面接授業(スクーリング)」が義務付けられている。

専門学校設置基準におけるスクーリングの時間数は、授業科目(講義・演習・実習)の区分によって異なる。

授業の方法	1 単位あたりの総学習時間	うち、必要なスクーリング時間数
講義	45 時間	約 15 時間 (※1)
演習	45 時間	約 30 時間
実習	45 時間	約 45 時間 (※2)
実技	45 時間	約 45 時間

(※1) 講義について: 多くの学校では「1 単位につき○○時間のスクーリング」と設定されるが、基準上は学習内容の構成比率による。

(※2) 実習について: 医療・福祉・製菓などの実習を伴う分野は、通信制であっても 100%スクーリング(または施設実習)が必要となるケースが大半である。

(3)【重要】メディア授業による特例(スクーリングの代替)

近年、特に注目されているのが「メディア授業(高度な ICT 教材を用いた学習)」によるスクーリング時間の免除(代替)措置である。設置基準および関連通知により、以下の条件を満たすメディア授業を行った場合、本来必要なスクーリング時間の一部をメディア授業に置き換えることができる。

①代替可能な上限:

原則として、各科目のスクーリング必要時間数の 6 割〜8 割程度まで(分野や科目により異なるが、上限が緩和されている)。

ただし、「全てをメディア授業にする」ことは原則認められておらず、試験や 一部の指導に対面で行う必要がある。

②要件

教員との質疑応答機能があること(双方向性)。

受講履歴(ログ)が管理できること。

学習効果が対面授業と同等であると認められること。

【実務上のポイント】

多くの通信制専門学校では、この特例を活用し、「自宅で動画講義を視聴＋小テスト」を行うことで、実際に校舎へ通う日数を「年数回」や「夏期の集中講座のみ」に圧縮している。

(4)添削指導(レポート)の要件

スクーリング以外の学習時間を担保するために、添削指導(レポート提出)が必須である。

標準的な回数: 1 単位につき 3 回程度の課題提出が目安とされることが多いです(科目の性質により 1 回〜数回と変動可)。

方法: 郵送によるレポートだけでなく、Web 上の LMS(学習管理システム)を通じた提出・添削も認められている。

■1 単位取得のモデルケース

構成要素	従来型 (スクーリング重視)	メディア授業活用型(特例適用)
自学自習	テキスト学習	テキスト学習
レポート	3 回提出	3 回提出(Web 可)
スクーリング	15 時間(約 2〜3 日通学)	数時間(試験・補講のみ) ＋ 動画授業

【注意点】専門分野による法的な縛り

上記は"専門学校設置基準"の一般則だが、取得を目指す国家資格によってさらに厳しい指定規則が存在する。

①社会福祉士・精神保健福祉士: 厚生労働省の指定規則により、スクーリング時間数や実習日数が厳格に決まっています。

②看護師・美容師等: 通信課程であっても、実技を伴うためスクーリングのウェイトが非常に重くなります。

これらの分野では、文部科学省の設置基準に加え、各所管省庁(厚労省など)の養成施設指定規則を優先して遵守する必要がある。

3.3 学習時間の内訳構成案

「1 単位（45 時間）」の学習時間の内訳構成案を示す。

特に、「メディア授業（e ラーニング）」を導入して通学（スクーリング）負担を減らすモデルと、従来の標準的なモデルを比較して提示する。

(1) 1 単位（45 時間）の学習時間構成シミュレーション

ここでは、最も一般的な「講義科目（座学）」と、実技を伴う「演習科目」の 2 パターンで構成案を提示する。

①パターン A：講義科目（理論・概論など）

法的要件：スクーリング（面接授業）が比較的少なくて済む区分。

1 単位の基準：全 45 時間のうち、約 15 時間がスクーリング相当である必要がある。

構成要素	① 従来型（通学重視）	② メディア活用型（通学圧縮）
A. 面接授業 （対面スクーリング）	15 時間 （約 2〜3 日通学）	3 時間 （試験・ガイダンスのみ通学）
B. メディア授業 （動画視聴・Web 小テスト）	0 時間	12 時間 （自宅で Web 受講）
C. 自学自習 （テキスト学習・レポート作成）	30 時間	30 時間
合計	45 時間	45 時間

【ポイント】「メディア活用型」では、本来必要な 15 時間のスクーリングのうち、約 8 割（12 時間分）を e ラーニングに置き換える構成案。これにより、学生は「期末試験の 1 回だけ登校すれば単位取得可能」という設計が可能になる。

②パターン B：演習科目（プログラミング・簿記・語学など）

法的要件：講義よりも実践的な指導が必要なため、スクーリングの比重が高くなる。

1 単位の基準：全 45 時間のうち、約 30 時間がスクーリング相当である必要がある。

構成要素	① 従来型（通学重視）	② メディア活用型（通学圧縮）
A. 面接授業 （対面スクーリング）	30 時間 （約 5〜6 日通学）	10 時間 （重要ポイント・集表のみ対面）
B. メディア授業 （演習動画・画面操作等）	0 時間	20 時間 （動画を見ながら自宅で操作）
C. 自学自習 （課題制作・予習復習）	15 時間	15 時間
合計	45 時間	45 時間

【ポイント】演習科目でも、画面共有や双方向チャットを用いた高度なメディア授業を行うことで、対面授業の一部を代替可能。ただし、講義科目に比べると対面の必要性が高いため、一定の日数（数日程度）の登校日を設定するのが一般的。

(3)「自学自習（C）」の計算根拠の作り方

シラバス（授業計画書）を作成する際、「C. 自学自習」の時間数をどう根拠付けるかが重要である。文部科学省や認可権者（都道府県）への申請時には、以下のようなロジックで説明する。

【計算式：レポート課題の想定所要時間 × 回数】

例えば「自学自習 30 時間」を埋めるには以下のように設定します。

課題の回数：1 単位につき 3 回のレポート提出を設定。

1 回あたりの重み：レポート 1 本を完成させるために必要な学習時間を「10 時間」と設定。

テキスト読込：3 時間

調査・思考：4 時間

レポート作成：3 時間

計 10 時間

計算：10 時間 × 3 回 ＝ 30 時間の自学自習

(4) 設置認可申請上の注意点

カリキュラムを編成する際は、以下の点に注意が必要である。

①メディア授業の上限： 全ての授業をメディア化することはできない。卒業に必要な総単位数のうち、メディア授業で修得できる単位数には上限（一般的に 60 単位まで等）が設けられている場合がある（※大学通信教育設置基準に準拠する場合が多いですが、専門学校の場合は都道府県の指導指針による）。

②試験の実施方法： 単位認定試験（期末テスト）は、原則として「対面（面接授業時）」で行うことが推奨されている。Web テストのみで完結させる場合は、本人確認（替え玉受験防止）の厳格なシステム要件が求められる。

3.4 成績評価と履修管理の基本設計

通信制課程では、全日制以上に「本人確認の厳格さ」と「学習プロセスの担保」が監査（都道府県・文科省）で重視される。そのため、LMS（学習管理システム）のログ活用が鍵となる。

(1) 成績評価基準の構成案

科目タイプ（座学系／実習・演習系）によって配分を変えるのが一般的。

【重要】評価の前提条件（受験資格）

評価（点数化）を行う前に、以下の「足切りライン（受験資格）」を設ける必要がある。これを満たさない学生は、点数に関わらず「未履修（F 評価）」となる。

・レポート提出率：100%（全回提出必須）

・スクーリング出席率：規定時間数の 100%（または 8 割以上）

・メディア授業（動画）視聴率：100%（LMS ログで確認）

上記の条件をクリアした学生に対し、以下の配分で 100 点満点の評価を行う。

①パターン A：講義科目（知識重視）

例：概論、法規、マネジメント論など

評価項目	配分比率案	内容・備考
① 期末試験（単位認定試験）	50%	**原則対面（スクーリング時）**に実施。本人確認を確実に行うため、最もウェイトを高くします。
② レポート（添削課題）	30%	全 3 回程度の平均点。コピペチェックツール等での独自性確認も含みます。
③ 平常点（LMS 小テスト）	20%	動画視聴後の確認テスト（理解度チェック）のスコア。視聴完了だけでなく「理解しているか」を問います。
合計	100%	60 点以上で「可（単位認定）」

②パターンB：演習・実習科目（スキル重視）

例：プログラミング、デザイン制作、介護実技など

評価項目	配分比率案	内容・備考
① 成果物・実技試験	50%	制作物のクオリティや、スクーリング最終日に行う実技テストのスコア。
② スクーリング取り組み姿勢	30%	対面授業時の積極性、課題への取り組み、グループワークへの貢献度など。
③ LMS 課題・プロセス評価	20%	中間提出物の進捗状況や、LMS 上での質疑応答・掲示板への書き込み頻度など。
合計	100%	60 点以上で「可（単位認定）」

(2) 卒業要件・進級要件の設計

専門学校（2 年制の場合）の法的基準をベースに、学校独自のハードルを設定する。

A. 卒業要件（法定＋α）

以下のすべてを満たすこととする。

1.在学期間：2 年以上

2.総修得単位数：62 単位以上（専門学校設置基準準拠）

3.総授業時数換算：1,700 時間以上

4.必修科目の完遂：指定された必修科目をすべて修得していること。

5.（オプション）卒業研究・制作：卒業制作の提出および合格。

B. 進級要件（1 年→2 年）

通信制は「自分のペース」が前提だが、学習離脱を防ぐために緩やかな進級要件を設けることを推奨する。

①案 1（単位数ベース）：1 年次に履修登録した科目のうち、20 単位以上（または 30 単位以上）を修得していること。

②案 2（必修科目ベース）：1 年次の「基幹必修科目（例：○○基礎理論）」を修得していること。

※これを満たした場合、仮進級とするか、留年とするかは学則で定めます。通信制では「原級留置（留年）」より

(3) 履修モデル（カリキュラム・ツリー）案

2 年制（全 62 単位以上）の場合の標準的なモデル。

単位配分の目安

一般教育科目（教養）：10～15 単位

専門基礎科目：15～20 単位

専門科目（中核）：30～40 単位（実習・演習含む）

【モデルケース：IT・情報処理学科（通信課程）】

学年	科目区分	科目名例	単位数	学習形態
1年次	一般・基礎	情報リテラシー ビジネス実務マナー IT社会論	8	メディア主
	専門基礎	コンピュータ概論 アルゴリズム基礎 ネットワーク基礎	12	メディア 一部スクーリング
	専門演習	プログラミング基礎（Python／Java） Webデザイン演習Ⅰ	10	スクーリング重視
	小計	（年間約30単位履修）	30	
2年次	専門応用	データベース実務 システム設計論 情報セキュリティ管理	12	メディア主
	専門演習	Webアプリケーション構築 チーム開発演習	12	スクーリング重視
	総合	卒業制作（プロジェクト学習） 就職・キャリア支援講座	8	混合型
	合計	（2年間で62単位以上）	62+	

(4) 運用上のアドバイス（通信制特有）

①「単位認定試験」の不正防止

LMS 上のテスト（CBT）だけで成績を決めるのはリスクがある（替え玉受験の可能性）。成績の 50%程度を占める最終試験は、スクーリング期間中に教室で実施（ペーパーテスト等）するか、オンラインで行う場合は「AI 監視付きテストシステム」や「Web カメラ常時接続」を導入する必要がある。

②LMS の進捗管理

「動画を再生しっぱなしで見ていない」を防ぐため、動画の途中でクリックしないと進まない仕組みや、チャプターごとの小テストを必須化する設定（これらをクリアしないとレポート提出ボタンが押せない等）を LMS 側で組むことが重要である。

3.4 単位互換制度の活用

通信制専門学校における単位互換制度は、募集力・学習継続率・進路実績を高めるための「戦略的な制度設計」が重要となる。

(1) 単位互換制度の基本整理（前提）

通信制専門学校での単位互換は、主に以下との連携で活用されます。

①通信制高校

②大学・短大・専門学校（通学・通信）

④ 高等専修学校

④企業研修・資格講座（一部）

※ 専門学校は「単位」ではなく履修時間（○時間＝1 単位相当）で管理されるため、教育課程表・シラバスの整合性が最重要になる。

(2) 活用方法① 通信制高校との接続・連携

①目的

高校中退防止

高校→専門学校への内部進学ルート形成

②具体例

高校在学中　　専門学校側

情報・IT・デザイン等の専門科目　　専門学校 1 年次の一部科目として認定

探究学習・課題研究　　専門演習として読み替え

③効果

専門学校 1 年次の履修軽減

早期専門教育　→ 就職実績向上

「高専一貫型」ブランディング

参考「高校 3 年＋専門 1 年で卒業・就職」モデルも可能

(3) 活用方法②｜ダブルスクール・併修モデル

【対象】社会人　大学生・通信制大学在学生　フリーランス志向層

【仕組み】大学の一般教養 → 専門学校の基礎科目として認定

専門学校の実習 → 大学の自由選択科目として認定

【メリット】

学費・学習負担の軽減

資格×学位×実務の組み合わせが可能

社会人の再教育（リスキリング）に強い

(4) 活用方法③｜資格・検定を単位化する

単位認定しやすい資格例

IT パスポート / 基本情報技術者　日商簿記　MOS　色彩検定・CAD 利用技術者

介護職員初任者研修 など

【活用ポイント】

事前取得資格 → 入学時単位認定

在学中取得　→ 卒業単位に算入

■ 学生募集時に「資格を取っていれば学習期間短縮」と訴求できる

(5) 活用方法④｜モジュール型カリキュラム設計

設計思想

1 科目一完結型

他校でも評価しやすい構成

例（IT 系）

プログラミング基礎（90 時間）

Web 制作実習（90 時間）

データ活用基礎（45 時間）

■他校・他課程とも換しやすく、連携拡張が容易

(6) 活用方法⑤｜途中転籍・再入学対応

想定ケース

他専門学校からの転入

大学中退者の再スタート

一度退学した社会人の再入学

【ポイント】

履修証明書ベースで柔軟認定

最大認定上限(例:卒業要件の 50%)を設定

■「やり直せる学校」という評価につながる

(7) 制度設計時の実務チェックリスト

- 教育課程表と時間数の整合
- シラバスの学習到達目標の明確化
- 単位認定基準(成績・評価方法)
- 学則・履修規程への明記
- 行政(都道府県)との事前協議

※ 特に通信制に指導時間・評価方法の説明責任が重視される。

(8) 成功している学校の共通点

- 単位互換を「例外」ではなく標準制度として設計している。
- 高校・大学と協定書をテンプレ化している
- 募集広報で「学習期間短縮」「学費軽減」を明確に訴求している

第４章 結論と今後の開発ロードマップ

(教育システム基盤(LMS)の設計と学習サポート体制)

4.1 調査結果の総括と課題の特定

本調査は、令和６年度学校教育法等の改正（2026 年４月施行）を背景に、専門学校が高等教育機関としての地位を確立し、多様な学習者に対応した「通信制・単位制コース」を開講するための制度的・実務的条件を明確にすることを目的とした。

調査結果を総括すると、新コースの実現は、単なる教育手法の追加ではなく、法的な義務と教育の質の保証を LMS（学習管理システム）の機能に完全に統合する戦略的なデジタルトランスフォーメーション（DX）プロジェクトであると結論づけられた。結論として、専門学校が今後取り組むべき課題は以下の３点である。

（1）法令遵守と制度設計の絶対的要件

2026 年４月以降、専門課程は単位制に限定され、修了要件は「修業年限×31 単位以上」となる見通しである。通信制コースの開講にあたっては、１単位＝45 時間の原則に基づき、学習時間の内訳（自学自習、レポート、スクーリング、メディア授業）を科目ごとに法定要件に適合させる必要がある。特に、学習者の通学負担を軽減するための「メディア授業によるスクーリング代替特例」の適用には、LMS による正確な学習ログ管理、双方向性の確保、および厳格な本人確認（試験時）*が不可欠となる。この観点から、LMS 導入は単に DX ではなく、法令遵守のための必須インフラ投資として位置づけるべきである。

（2）LMS を中心とした教育の質保証

通信制高校の実態調査では、ICT 活用が最新鋭のメディアミックス型と旧来のテキスト重視型に二極化していることが判明した。専門学校が開発を目指すコースでは、この最低限の質的レベルを超え、LMS を活用したラーニングアナリティクス（LA）に基づき、学習のつまずきを特定し、ドロップアウト（脱落）リスクの高い学生へ早期に介入する体制（Early Intervention）を構築する必要がある。「教員向けダッシュボード」を通じて、データに基づく指導（データ駆動型教育）を実現することが、高等教育機関としての質の向上に直結する。

(3) 戦略的な連携と運用の課題

先行事例からは、同一教育グループ内での LMS・コンテンツ共有や、AO 入試・推薦合格者向けに入学前から LMS を開放する「プレカレッジ」の有効性が確認された 1。システム選定においては、機能の多さよりも「生徒のエンゲージメント(ログイン継続)」を最優先する必要があり、特に「ID・パスワードの壁」や「孤独の壁」といった、通信制特有の学習離脱につながる「4 つの壁」への対策を運用設計に組み込む必要がある 。

そして具体的な取り組みとして以下の要件が求められている。

4.1.2 取り組み課題

LMS を「法令遵守のための必須インフラ」として確立する。

単位制通信コースの導入は、単なる教育手法の追加ではなく、法的な義務を果たすための DX（デジタルトランスフォーメーション）プロジェクトとして位置づけなければならない。

(1) 学習ログの厳格な管理と双方向性の確保

法令上の１単位＝45 時間という学習時間の原則を証明するため、LMS(学習管理システム)による正確な学習ログ（動画視聴時間、小テストの解答履歴など）の取得と管理が不可欠である。特に、通学負担を軽減する「メディア授業によるスクーリング代替特例」を適用するためには、LMS が教員との質疑応答機能（双方向性）を備えていることが必須要件となる。

(2) 単位認定試験の不正防止

成績評価の根幹となる単位認定試験（期末試験）は、厳格な本人確認が可能な対面（スクーリング時）での実施を原則とすることが推奨される。Web テストで完結させる場合は、AI 監視や Web カメラ常時接続といった厳格なシステム要件を導入する必要がある。

データに基づく学習者の離脱を防ぐ

「早期介入体制」を構築する通信制特有の課題である学習の孤独化やドロップアウト（脱落）を防ぐため、LMS を活用したラーニングアナリティクス(LA)に基づく能動的なサポート体制（早期介入）の構築が求められる。

教員向けダッシュボードの実装

LMS に教員向けのダッシュボードを組み込み、17 日以上ログインなし」「課題未提出が２件以上」「小テスト平均点が一定以下」といったドロップアウト予兆を検知するアラート機能を実装する。教員はこれらのデータ(学習ログ)に基づき、遅れている学生に個別メッセージや面談を迅速に行う早期介入(Early Intervention)フローを確立する必要がある。

(3)「4 つの壁」への対策を運用設計に組み込む

学習者のエンゲージメント維持を最優先し、「ID・パスワードの壁」「コンテンツ量の壁」「孤独の壁」「高校側のカリキュラムとの壁」といった通信制特有の学習障壁への具体的な対策を運用ルールに組み込む必要がある。例えば、コンテンツは１本５分～10 分以内のマイクロラーニング化を徹底し、フィードバックによる双方向性を確保する。

(4) 法令要件を満たした「詳細設計フェーズ」へ直ちに移る

フェーズ	目標と主なアクション
フェーズ 1: 詳細設計	**LMS ベンダーの最終選定**と契約を完了させる。1 単位 45 時間ルールに基づき、講義/演習/自習/スクーリング/メディア授業の配分を明確にした**全科目のシラバス詳細(評価基準・学習時間構成)**を確定させる。
フェーズ 2: システム構築・コンテンツ制作	ベンダーと共に LMS 本番環境を構築し、**コア科目(必須科目)のデジタル教材制作**(マイクロラーニング化)を完了させる。同時に、教職員向けの LMS 操作研修を徹底的に実施する。
フェーズ 3: テスト運用と認可申請	LMS の本番稼働チェックリスト(UAT)を完了させ、**LMS を活用した学習指導方法の詳細(特例要件の根拠)**を文書化した認可申請書を作成し、所轄庁へ提出します。

特に、**スクーリング(対面授業)の具体的な実施方法と LMS のシステム選定および運用体制の確立**が、次段階で最も迅速に具体化すべき主要課題と特定されている。

(4) 今後のアクションロードマップ

前項において、新コース開講に必要な制度設計の論点は整理されたが、「スクーリング(対面授業)の具体的な実施方法」や「LMS のシステム選定と運用体制の確立」が次段階の主要課題となる。ロードマップについては事項に示す。

4.2 開発ロードマップ（次段階へのアクションプラン）

(1)フェーズ 1：詳細設計（LMS ベンダー選定、カリキュラム詳細化）

このフェーズは、通信制課程の認可要件と教育目標に基づき、LMS の「機能」と「コンテンツ」の設計図を確定させることが目的である。

■マイルストーン

・LMS ベンダーの最終選定と契約完了

・全科目のシラバス詳細（評価基準・学習時間構成）確定

・システム連携要件（教務システム等）の確定

区分	主なタスク	詳細な作業内容と成果物
LMS 選定・設計	ベンダー選定と RFP 作成	設置基準への対応可否、拡張性、保守体制、コストを比較検討し、最終候補を決定。
	LMS の機能詳細設計	成績評価比率、ログ管理、添削フローなど、通信制特有の要件を LMS 機能に落とし込む。
	既存システム連携設計	学籍情報、履修情報、成績情報をどのように LMS と教務システム間で同期させるか設計。
カリキュラム詳細化	全科目の学習時間構成の確定	1 単位 45 時間ルールに基づき、講義/演習/自習/スクーリング/メディア授業の配分を科目ごとに決定。
	評価基準の確定	試験、レポート、LMS 利用ログの比率など、成績評価の基準を具体的に決定し、学則に反映。
コンテンツ計画	教材制作の優先順位付け	必修科目、基礎科目から順に、動画、テキスト、確認テストの制作スケジュールと担当者を決定。

(2)フェーズ 2：システム構築・コンテンツ制作（LMS 導入、教材制作）

決定した設計図に基づき、LMS 環境を構築し、実際に学生が学習に使えるコンテンツを制作・登録していく段階です。

■マイルストーン

・LMS 本番環境の構築と初期設定完了

・コア科目（必須科目）のデジタル教材制作完了

・教職員向け LMS 操作マニュアルの作成完了

区分	主なタスク	詳細な作業内容と成果物
システム構築	LMS 環境構築・設定	ベンダーと共に本番サーバーのセットアップ、学生・教員アカウントの初期登録、権限設定を実施。
	ログ管理機能の実装確認	動画視聴時間、テスト受験日時、レポート提出日時など、単位認定に必要なログが正確に取得できるか検証。
	セキュリティ・認証強化	アクセス制限、本人認証（特に試験時）の仕組みを導入・設定。
コンテンツ制作	講義動画の撮影・編集	専門分野の教員と連携し、詳細設計に基づいた動画教材を制作。
	デジタル教材の作成	レポート課題、確認テスト、PDF 教材（テキスト）などを LMS に登録。
	シラバス情報登録	各科目の学習計画、評価基準、履修モデルを LMS 上に公開・登録。
教職員研修	教員向け操作研修の実施	LMS の基本操作、レポート添削方法、ログ参照方法、メディア授業実施方法などを徹底指導。

(1)フェーズ 3：テスト運用と認可申請等

システムの最終チェックと、通信制課程を設置するための行政手続きを行う。

■マイルストーン

・LMS の本番稼働チェックリスト完了（Go-Live）

・通信制課程の設置認可申請書の提出

・初年度の学生募集開始

区分	主なタスク	詳細な作業内容と成果物
テスト運用（UAT）	ユーザー受入テスト（UAT）	少数精鋭の教職員・学生候補者で、履修登録から単位修得までの全プロセスをシミュレーション。
	不具合修正とパフォーマンス調整	LMS の動作速度、同時アクセス時の安定性、ログ取得の不備などを最終修正。
	教育効果の検証	テスト運用受講者に対し、メディア授業の理解度調査を実施し、コンテンツの修正を行う。
認可申請準備	認可申請書の作成	学則、設置計画、教員名簿、LMS を活用した学習指導方法の詳細（特例要件の根拠）を文書化。
	行政の現地調査対応	LMS の機能やログ管理システムを実演し、基準への適合性を説明。
募集開始	LMS の学生向け案内作成	学習方法、操作方法、通学（スクーリング）日程などを記載したガイドを作成し、広報活動を開始。

文部科学省委託事業
令和7年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業
（人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム）
「通信制高校連携型キャリア形成支援による地域密着人材育成モデルの構築事業」
LMS・単位制・通信制等に関する 制度文献調査報告書

学校法人YIC学院
●本書の内容を無断で転記、掲載することは禁じます。

5-6　ゲーミフィケーションの有効活用　資料6

資料 15

教育とゲーミフィケーション

ゲーミフィケーションについて成功させるために留意すべき 4 つのカテゴリー、20 のポイント

1. 学習設計と目的の明確化

ゲーミフィケーションはあくまで「手段」であり、「目的」ではない。

1. **学習目標（LO）との一致**: ゲーム要素が学習内容を邪魔していないか。
2. **手段の目的化を避ける**: 「ポイントを稼ぐこと」が目的になり、肝心の学習内容が二の次にならないようにする。
3. **適切なフィードバック**: 正解・不正解に対して、即座に、かつ具体的な解説を伴うフィードバックを与える。
4. **「失敗」の許容**: 何度でも挑戦できる環境（リトライ）を整え、失敗を「学びの過程」としてポジティブに捉えさせる。
5. **スモールステップの設定**: 達成感を頻繁に味わえるよう、課題を細分化する。

2. 動機付けと心理的配慮

学習者のやる気をどう持続させ、健全な競争環境を作るかが鍵。

6. **内発的動機付けの重視**: 報酬（外発的動機）がなくなっても、学習そのものへの興味（内発的動機）が残るように設計する。
7. **「フロー状態」の維持**: 難易度が低すぎて退屈させず、高すぎて挫折させない絶妙なバランスを保つ。
8. **アンダーマイニング効果への警戒**: 報酬を与えることで、もともとあった「好きでやる気持ち」が薄れないように注意する。
9. **競争と協力のバランス**: 過度なランキング争いは下位層の意欲を削ぐため、ゲームでの協力要素も取り入れる。
10. **ナラティブ（物語性）の導入**: 学習にストーリー性を持たせ、自分が主人公として参加している感覚（没入感）を作る。

3. システムとルールの設計

適切な難易度と公平性が、学習者の継続率を左右する。

11. **明確なルール設定**: どうすればポイントが得られるのか、何がゴールなのかを誰にでもわかるように示す。
12. **プログレスの可視化**: 進捗バーやレベルなど、自分の成長が目に見える形にする。
13. **多様な報酬体系**: ポイントだけでなく、バッジ、カスタマイズ要素、特別な権限など、学習者の好みに合わせた報酬を用意する。
14. **オンボーディングの簡略化**: 最初の使い始めで迷わせない。チュートリアルは短く直感的にする。
15. **データの活用**: 学習者の行動ログを分析し、どこでつまずいているかを把握して改善につなげる。

4. 運用と倫理的側面

教育現場での長期的な運用には、環境への配慮も欠かせない。

16. **アクセシビリティへの配慮**: デバイス環境や IT リテラシー、心身の特性に関わらず、誰もが参加できるようにする。毎回操作に戸惑うことのないように同じ実習室を確保する
17. **プライバシーとデータ保護**: 学習データ（ログイン情報など）の取り扱いには細心の注意を払う。
18. **教員の役割の再定義**: 教員は「教える人」から、ゲームの進行を助け、学びを深める「ファシリテーター」へと役割を変える。
19. **コスト対効果の検討**: 開発や運用にかかる時間・費用が、得られる教育効果に見合っているか。
20. **飽きへの対策**: 定期的なアップデートや新しいイベントの導入など、長期的な「鮮度」を保つ工夫をする。

導入を成功させるために

- **「単発のイベント」から始める**: 週に 1 回、授業の最後に 5 分をやるだけで、学生・生徒の「次の授業への期待感」を持たせる。
- **アナログな要素を組み合わせる**: デジタルツールを使わなくても、「目標達成ごとにシールを貼る」「レベルアップで称号を授与する」といったアナログな掲示板を併用すると、教室全体の盛度感が上がります。
- **教員が解答できる**：解答できないと信頼感が薄れるわれる。課題とするゲームは教員自身が解答、解説できるものを選定する。生徒から想定外のゲームの解答や解説を求められた場合、得意な学生をリストアップしておき指名する。解答者は生徒学生を称賛する。

PC のオンラインゲーム（ブラウザゲームや教育用マルチプレイヤーゲーム）を活用して、グループごとにチャレンジさせる形態に、学生・生徒の没入感が非常に高く、リアルタイムでの意力が不可欠になるため、非常に強力な学習ツールになる。ただし、**「ただ遊んで終わり」にならないための仕掛け**が重要である。

1. 実施・運用のステップ

オンラインゲームを活用する場合、以下のフローで進行するのがスムーズである。

① プラットフォームの選定

グループでゲーミフィケーションを実施するには PC 画面が望ましい。スマホは個人練習用。

ブラウザベースの「点クリック型ゲーム」を共有画面で解く。

② グループ構成と「画面共有」の工夫

- **1 人 1 台 PC がある場合**：同時に開始し、それぞれが異なる視点から情報を集める。
- **グループに 1 台の場合**：「ドライバー（操作者）」と「ナビゲーター（指示・分析者）」に分け、数分おきに操作を交代する。

③ ゲーミフィケーションのルール設定

- **タイムアタック**：全ゲームのクリア時間をランキング化。
- **発見ボーナス**：メインの展開以外に、特定の「オブジェクト（隠し要素）」を見つけさせる加点。
- **ペナルティ**：間違にクリック（回答）すると、一定時間操作禁止になるなどのルールを設け、論理的思考、を促す。

2. コミュニケーションを促す「役割分担（ロールプレイ）」

PC ゲームでは、一人の「得意な子」が全部進めてしまう現象（アルファゲーマー問題）が起きがちです。これを防ぐために役割を固定する。一例として

- **司令塔（ディレクター）**：全体の進捗を確認し、誰が何を探すか指示を出す。
- **記録係（ログ）**：見つけたヒントや数字を、共有ドキュメント（Google スプレッドシート等）にメモする。

資料 15

る。

- **調査員（スカウト）**：実際に PC 画面を動かし、隅々まで探索する。
- **分析官（アナリスト）**：ゲーム内の情報を観察し調査員にアドバイスを送り答えを導く。

3. PC・オンラインならではの留意点（15 項目）

導入時に特に注意すべきポイントを、技術面と教育面に分けて考える。

【技術・環境面】

1. **ネットワーク負荷**: 全員が一斉にアクセスして回線が落ちないか、事前テストが必須。
2. **ログイン・アカウント**: アカウント作成が必要な場合、個人情報保護の観点から学校用アカウントでの運用を徹底。
3. **フィルタリング**: 学校のネット制限でゲームサイトがブロックされていないか確認。
4. **デバイス格差**: マウス操作、キーボード操作の慣れ不慣れによる不公平感を考慮。
5. **不適切な広告**: 無料のブラウザゲームを使う場合、不適切な広告が表示されないかチェック。

【運用・管理面】

6. **「遊び」への誘転**: 目的を忘れて関係ないサイトへ移動したり、チャットで遊び始めたりしないよう、管理ソフト等で画面を監視。
7. **3D 酔いへの配慮**: 画面を激しく揺れるゲームの場合、体調を崩す学生・生徒がいるため、こまめな休憩を促す。
8. **チャットの倫理**: ゲーム内チャットを使う場合、誹謗中傷や攻撃的な言葉を使わないよう事前指導。
9. **行き詰まり対応**: ゲームが進行不能になった際の予備（アナログのヒントや代替問題）を用意。

【教育・心理面】

10. **傍観者の排除**: PC 操作が得意な子だけが盛り上がらないよう、操作者以外が持てる「紙のヒント」を用意する。
11. **振り返りの時間確保**: ゲームの熱狂で終わらせず、 なぜあの時協力が必要だったか、を言語化させる時間を必ず取る。
12. **適度な難易度**: 難しすぎると「動画の攻略サイト」を見始め、自分で考えなくなるため、ヒントの出し方を工夫する。
13. **勝利至上主義の防止**: 早くクリアすることだけが目的にならないよう、プロセスの美しさや協力姿勢を評価項目に入れる。
14. **オンラインマナー**: 挨拶実習に関連付け、「オンライン会議やリモートワークでの協力体制」の練習であることを意識させる。
15. **成果の可視化**: スコアだけでなく、グループで作成した「攻略ログ（メモ）」を提出させ、思考の過程を評価する。

4. 社会で実際に必要とされる能力への紐付け例

- **間違い探し × 品質管理**: 「PC 画面上の製品画像の間違いを探す」ことで、集中力と正確性を養う。
- **脱出ゲーム × 報連相**: 「自分の画面にしか映っていないもの」を言葉だけで正確に他メンバーへ伝える練習。
- **オブジェクト発見 × 調査力**: 膨大なデジタルデータから必要な情報を検索・抽出するスキルの習熟。

資料 15

学生・生徒たちが自然と話し合い、協力せざるを得ない仕組み

1. ゲームタイプ別の具体的な学習活動案

それぞれのゲームを、単なる「遊び」から「教育的チャレンジ」に昇華させる構成案。

ゲームタイプ	協力（コミュニケーション）を促す仕掛け
脱出ゲーム	**情報の断片化（ジグソー法）**： 中級～上級では各所に仕掛けがあり息詰まることも多い。 各メンバーに異なるヒントを配り、全員の情報を突き合わせないと解けないようにする。
間違い探し	**役割分担**： 「見る係（スライドを見る）」「書く係（解答用紙）」「確認係（照らし合わせる）」に分け、1 回ごとに役割を交代する。
オブジェクト発見	**分担と統合**： 「オブジェクト 1 はＡさん、オブジェクト 2 はＢさん」と対象を分担する。対象発見終了者は求められば他者に協力する

2. コミュニケーション力を高める運用のコツ：3 つの仕掛け

単にグループにするだけでなく、以下の「仕掛け」を導入することで、会話の質が変わる。

① 情報を「非対称」にする

全員が同じ画面、同じプリントを見るのではなく、「A さんにしか見えない情報」「B さんにしか見えない情報」を作る。

- **運用方法**: 可能なタブレットを 1 人 1 台使い、グループ内で異なるヒント画像を配信する。
- **効果**: 自分の持っている情報を「言葉」で説明しなくてはならなくなるため、説明力が向上する。

② 「役割」を明確に与える

ゲーム開始前に、グループ内で役割を決めさせる。一例として紹介た前述のほかにの役割分担の他にも下記のようなものもある。

- **リーダー**: 全体の進捗を確認し、全員が発言しているか目配りする。
- **アナリスト**: 見つけた情報が正しいか、教科書や資料で裏取りをする。
- **レコーダー**: 情報を整理し、最終的な回答を組み立てる。
- **タイムキーパー**: 残り時間を意識し、決断を促す。

③ 「ヒントカード」システムの導入

行き詰まって沈黙してしまうのを防ぐため、あまで「ヒントカード」というリソースを渡す。

- **運用方法**: 各グループに 2～3 枚の「ヒント請求券」を渡す。
- **効果**: 「今、ヒントを使うべきか？」という合意形成のための議論が発生する。

3. 具体的な実施フロー（1 コマ 50 分を想定）

1. 導入・ルール説明（10 分）
    - ストーリー（世界観）の提示。
    - 勝利条件（脱出、全滅気など）と役割分担の決定。
2. ゲーム・ミッション（30 分）

- 前半: 個別の情報を集める（間違い探しやオブジェクト発見）。
- 後半: 集めた情報を統合して、最後の難問（脱出の鍵）を解く。
- ※教員は各グループを回り、会話が止まっているチームに「問いかけ」を行う。

3. **振り返り・リフレクション（10 分）**
   - ここが最も重要。「なぜ解けたのか？」「どの情報共有がうまくいったか？」を言語化させる。

アナログ現実世界と具体的な科目への応用

この 3 つのゲームをアナログ授業として「シリーズ化」にすることも可能ではないか。
例えば、「まずは間違い探しで基礎知識を確認（初級）→ オブジェクト発見で資料読解（中級）→ 最後に脱出ゲームで総合演習（上級）」といったカリキュラム。
「総合的な学習の時間」「就職実務」「ロングホームルーム（LHR）」は、いずれも「正解が一つではない課題」や「社会に出るための基礎力」を扱う場。
これらの授業の特性に合わせ、3 つのゲームタイプをどう具体化し、どのようにコミュニケーションを誘発するかについての案。

---

1. 【就職実務】マナー・書類作成の精度を高める活用案
就職実務では「正確さ」と「状況判断」が重要。
① 間違い探し：ビジネスマナー・敬語の「違和感」発見

- **内容:** 「面接室の入室シーン」や「履歴書のサンプル」の画像・動画・例文を 2 つ提示し、不適切な箇所をチームで探す。
- **協力の仕掛け:**
  - **役割:** 「身だしなみ担当」「言葉遣い担当」「所作担当」に分かれ、自分の担当範囲を重点的にチェックしてチームで統合する。
  - **振り返り:** 「なぜそれが間違いなのか？」を、マナーブック（資料）を根拠に説明し合う時間を設ける。

② オブジェクト発見：求人票の「条件・リスク」ハンティング

- **内容:** 複数の架空の求人票から、指定された条件（年間休日数、研修制度の有無、基本給の構成など）を素早く見つけ出す。
- **協力の仕掛け:**
  - **ジグソー形式:** 1 人 1 枚異なる企業の求人票を持ち、チームで「一番離職率が低そうなのは？」「一番スキルが身につきそうなのは？」といった議論を行い、1 社を選定させる。

---

2. 【総合的な学習の時間】探究・課題解決力を養う活用案
地域課題や SDGs など、情報の整理と論理的思考が必要。
③ 脱出ゲーム：地域課題解決の「ミッション・コンプリート」

- **内容:** 「放置竹林から里山を救え！」といったテーマを設定。各所に隠されたヒント（統計データ、住民の声、過去の解決事例）を解き明かさないと、最終的な「解決策の提案書」が完成しない（＝脱出できない）仕掛みにする。

- **協力の仕掛け:**
  - **情報統合:** A グループは「予算」、B グループは「住民の要望」というように別々の情報を持ち、グループ間で交渉や情報交換を行わないと答えが出ない設定にする。

---

3. 【LHR】クラスの親睦と自治能力を高める活用案
「誰一人取り残さない」クラス作りや、行事の企画に活用する。
④ オブジェクト発見×脱出ゲーム：クラスの「隠れた強み」探し

- **内容:** 教室内のあちこちに隠された「クラスメイトの意外な特技や長所」が書かれたカードを探し出し、それらを組み合わせて「ゲーム内での役割の割り当て」などの課題をクリアする。
- **協力の仕掛け:**
  - **対話の強制:** カードには「○○さんに『最近頑張っていること』を聞け」といったアクション指示を混ぜ、物理的な発見だけでなく、対話による情報獲得を組み込む。

---

4. 運用のための「3 ステップ・メソッド」
講師が運用する際に、以下の流れを意識しコミュニケーションが活性化させる。
STEP 1：チームビルディング（開始前 5 分）
ゲーム開始前に、チーム名と「今日のコミュニケーション目標」を決めさせる。

- 例：「全員が最低 3 回は発言する」「反対意見も一度受け入れる」

STEP 2：インターバル・ミーティング（中盤 5 分）
ゲームの途中で一度時計を止め、作戦会議の時間を強制的に設ける。

- 「現在、何が分かっていて、何が足りないか」をシートに記入。これにより、一部の学生・生徒だけが突っ走るのを防ぐ。

STEP 3：メタ認知リフレクション（終了後 10 分）
ゲームの結果（成功・失敗）よりも、「どう協力したか」を言語化する。

- 「○○さんのあの発言が、解決のヒントになった」「行き詰まった時、どうやって空気を変えたか」などを共有する。これが就職面接の「自己 PR（チームで取り組んだこと）」の直接的な練習になる。

---

5. 準備のポイント（ツール活用）

- **表計算ソフト（デジタル）:** 「脱出ゲーム」のパスワード入力画面として、正解すると次のヒント画像が表示されるように設定する。
- **付箋と模造紙（アナログ）:** 「オブジェクト発見」で見つけた情報を可視化する。デジタルとアナログを混ぜると、操作が得意な学生・生徒以外も活躍しやすくなる。

就職実務や LHR、総合的な学習の時間での具体例

---

1. 【就職実務】間違い探し：ビジネスメールの違和感を暴け！
「知識として知っている」状態から「実務で気づける」状態へ引き上げます。

- **課題:** 2 通のビジネスメール（A：完璧な見本、B：5 箇所のミスがあるメール）を提示します。
- **間違いのネタ例:**
  1. 件名：「お世話になります」だけで、用件（面接日程の件）が書かれていない。
  2. 宛名：会社名が略されている（(株) など）、または役職名が名前の後ろに来ていない。

3. **敬語:** 二重敬語（「おっしゃられる」）や、謙譲語と尊敬語の取り違え。
4. **記書き:** 集合場所や持ち物が本文に埋もれていて見にくい。
5. **署名:** 自分の連絡先（電話番号）が抜けている。

- **コミュニケーションの仕掛け:** 「なぜこれが失礼にあたるのか？」をチームで議論し、「相手の立場に立った修正案」まで作成させる。

---

2. 【総合学習】オブジェクト発見：地域の「宝」と「課題」ハンティング
膨大な資料から必要な情報を抜き出し、構造化する力を養います。

- **課題:** 地域住民への架空のインタビュー記事（3 ページ分）と、統計グラフを配付。
- **見つけるオブジェクト:**
  - 「高齢者が困っていること」3 つ。
  - 「若者が地域に残りたい理由」として挙げられたキーワード。
  - 「グラフとインタビュー内容が矛盾している箇所」。
- **コミュニケーションの仕掛け:** 情報を探す「調査員」と、それらを付箋で分類する「分析官」に分かれます。最後はチームで「この地域を救うための一言キャッチコピー」をひねり出させる。

---

3. 【LHR】脱出ゲーム：イベント実行委員の危機を救え！
論理的思考と合意形成を、身近なテーマで行います。

- **ストーリー:** 「予算と人手が足りない中、イベントの出し物を 1 つに絞り、校長先生の承認印をもらって教室を脱出せよ！」
- **謎解きのステップ:**
  1. **暗号解読:** クラスのアンケート結果（バラバラの紙）を並び替え、人気順位を特定する。
  2. **リソース配分:** 「予算」「準備時間」「必要人数」の 3 条件をすべて満たす出し物を、表を使って絞り込む。
  3. **交渉:** 最後に「反対派の意見」を論破するのではなく、どう取り込むかの解決策を 1 つ書き上げたらクリア。
- **コミュニケーションの仕掛け:** 全員が納得しないと「承認」が得られないというルールにし、「多数決ではなく対話で決める」プロセスを体験させる。

---

4. 実施・運用時の「成功へのチェックリスト 10」
講師が準備・進行する際に、これだけは確認しておきたいポイント。
【準備フェーズ】

- **目的の共有:** 「今日はゲームを通じて『伝える力』を鍛える上」と意図を伝えたか？
- **難易度の調整:** 最初の 5 分で 1 つ目のハードルを越えられる設定か？（挫折防止）
- **役割の明確化:** 「何もしない子」が出ないよう、物理的な役割（記録、計時等）を与えたか？
- **アナログとデジタルの併用:** 画面を見るだけでなく、手元で動かせる資料（カード等）があるか？

【進行フェーズ】

- **タイムマネジメント:** 残り時間を「あと 10 分！」「あと 3 分！」と実況して焦燥感（ーワクワク）を出しているか？
- **介入のバランス:** 教員が答えを教えていないか？（「あっちの資料をよく見た？」などのヒントに留める）
- **称賛のタイミング:** 正解した時だけでなく、良い議論をしているチームを全体の前で褒めたか？

【振り返りフェーズ】

- **スキルの言語化:** 「今のゲームのどの部分が、実際の就職後に役立ちそう？」と問いかけたか？
- **相互評価:** ゲーム内で「助かった発言や行動」を称え合う時間を設けたか？
- **次に繋げる問い:** 「次、もっと早く解くにはどういうコミュニケーションが必要だった？」と問いたか？

教育とゲーミフィケーションの段階について

---

1. オンラインゲームで楽しさを感じる
2. そのゲームをグループで行うことで仲間とのコミュニケーションを醸成
3. 役割分担してゲームを実施することで自己分析、他者受容を行う
4. このゲームを行うことがどの能力を育成していくかを実感
5. アナログ授業に実際に導入することでその効果を実感

今後について
・リアル脱出ゲーム実施の検討
・Kahoot!、ClassDojo、Minecraft: Education Edition などデジタル教育ツール利用の検討など

参考：ゲーミフィケーションで使用するオンラインフリーゲームのサイト集

＊倫理上問題ないと思われるもの、学生、生徒が行き詰った場合、ヒント・スキップ・解答表示の機能などがあり未達成感を感じたまま終わらないように配慮してあるもの、講師自身が解答を把握し、解説できるもの。英語のサイトもあるが講師の補佐、日本語への翻訳機能で対応可能

脱出ゲーム
・Vitamin　Hana
https://minigames.squares.net/hanawp/



難易度は初級から中級程度、絵柄が優しい。。

・rin の午後
https://rinnogogo.com/

資料 15



難易度は中級から上級程度、絵柄が上品。ヒント機能。
間違い探し
・Spot The Difference Daily
https://www.shockwave.com/gamelanding/shockwave-original-spot-the-difference-daily?date=26%2F01%2F16&play=true



難易度は初級から上級と幅広い。英語サイトだが直感的にできる。多くの他のサイトとは異なり、時間制限による強制終了が無いので安心して取り組める。解答機能あり

オブジェクト発見
・Find Out Hidden Object
https://myhiddengame.com/hidden-object/30626-find-out-hidden-object.html



難易度は中級と。英語サイトだが直感的にできる。時間制限なし。補助機能が充実

混合サイト
https://www.amajeto.com/



オブジェクト発見、脱出ゲーム。難易度は概ね中級で適正なものが多い

総合サイト
My Hidden Game
https://myhiddengame.com/



各ジャンルを集めた英語のポータルサイト。超初級から上級まで幅広い。圧倒的な量を誇る。

＊キーワードで検索すれば玉石混交で数多くヒットするが、教育的、倫理的な観点からみると不適切なものも多く、使用にあたっては講師が慎重に選択することが肝要である。

5-7　デジタル基礎：通信制高校生のスマホ活用のセキュリティ対応教材　資料7

3．公式ストア利用: 審査済みの安全なアプリのみ使用。



- 公式ストアのみを利用

App StoreやGoogle Play以外の「野良アプリ」は、ウイルス混入率が極めて高いため避けます。

4．不要アプリ削除:
攻撃の入り口を物理的に減らす。



- 不要なアプリの削除

使っていないアプリは「攻撃の隙（アタックサーフェス）」を増やすだけです。定期的に整理しましょう。

5．権限の最小化:
アプリに過剰な情報を与えない。



- 権限（パーミッション）の最小化

「計算機アプリが位置情報を求める」といった、機能に無関係な権限要求は拒否します。

✓「アプリの権限設定」を検索してみよう

6．サポート終了アプリの移行:
古いアプリを捨て、新しい代替品へ。



- 提供終了アプリのアンインストール 開発者がサポートを止めた古いアプリはセキュリティの穴になりやすいため、代替アプリへ移行します。

カテゴリー2：認証・ログインの強化
「本人確認」を二重三重にして、他人の侵入を阻みます。。

7．パスキー（PASSKEYS）の導入:
盗まれるパスワードをなくす最新技術。



- パスキー（Passkeys）の導入

パスワードを「覚える」から「デバイスで承認する」形式へ移行。フィッシング詐欺に物理的に耐性があります。

✓「パスキー」を検索してみよう

8．生体認証の活用:
覗き見のリスクを排除。



- 生体認証の活用

顔認証や指紋認証をメインにし、外出先でのパスコード入力を覗き見られるリスク（ショルダーハッキング：銀行のATMで高齢者の方が暗証番号を入力する時、悪い奴が横見や覗き見することをイメージしてみて）を減らします。

9．多要素認証（MFA）必須化:
IDが漏れてもログインさせない。



- 多要素認証（MFA）の必須化

標準ではMFAが使えないサービスでは、必ずアプリやSMSによる二段階認証（パスワード入れてもSMSなどに送られてくる番号を入力しないと先に進めない）を設定します。

✓「MFA」を検索してみよう

１０．複雑なパスコード:
推測されやすいパターンを避ける。



- 推測されにくいパスコード

「1234」や誕生日、Z字型のパターンなどは一瞬で見破られます。複雑なコードを設定しましょう。

✓「良いパスコード」を検索してみよう

１１．パスワードマネージャー:
全サイトで異なる強固な鍵を作成。



- パスワードマネージャーの利用

　何百ものパスワードを安全に生成・管理し、使い回しによる「芋づる式被害」を防ぎます。一つのパスワードを複数のサイトで使うと全滅してしまいます。

✓「パスワードマネージャー」を検索してみよう

カテゴリー３：通信とネットワークの安全
目に見えない「通信の通り道」を守ります。

１２．公共WI-FI（フリーWI-FI）の回避:
偽のアクセスポイントに繋がない。



- 公共Wi-Fiの原則利用停止

　暗号化されていない、または不審なWi-Fiには繋がないのが鉄則です。

✓「怪しいFree wi-fi」で検索してみよう

１３．VPNの利用:
通信内容を暗号化のトンネルで包む。



- VPNの常時・スポット利用

　信頼できないネットワークを使う際は、VPNで通信内容を暗号化して盗聴を防ぎます。

✓「VPN」を検索してみよう

１４．BLUETOOTH/NFCのオフ:
不要な通信窓口を閉じる。



- Bluetooth/NFCのオフ

　使わない時はオフにし、近距離からの不正ペアリングやデータ抜き取りを防止します。

✓ Bluetooth/NFCの落とし穴」を検索してみよう

１５．テザリングパスワード:
自分の電波にタダ乗り・侵入させない。



- テザリングのパスワード強化

スマホをルーターとして使用する際、パスワードの設定によっては、他人に悪用される恐れがあります。

✓「テザリング」「テザリングのリスク」を検索してみよう

カテゴリー４：物理的・紛失リスク対策
スマホそのものの盗難や、物理的なハッキングに備えます

１６．「デバイスを探す」有効化:
地図上で場所を特定。



- 「デバイスを探す」機能の有効化

紛失時にGPSで場所を特定し、遠隔で音を鳴らすための基本設定です。

✓「デバイスを探すには」を検索してみよう。

１７．リモートワイプ:
諦める時は遠隔でデータを消し去る。



- リモートワイプの準備

盗難時に、遠隔操作でスマホ内の個人情報を全消去できる状態にしておきます。

✓「リモートワイプ」を検索してみよう

１８．SIMカードのPINロック:
SIMを抜かれて別の端末で使われないように



SIMカードへのPINロック

スマホが盗まれた際、SIMカードを抜いて別の端末で使われ、SMS認証を突破されるのを防ぎます。

✓「SIMカードへのPINロック」「SMS認証」を検索してみよう

１９．覗き見防止フィルム:
背後からの盗み見を物理的に遮断。



- 覗き見防止フィルムの貼付

物理的に画面を見られないようにし、ログイン情報やメッセージ内容を保護します。

２０．公共充電ポートの回避:
USBからデータを盗む「ジュースジャッキング」を防ぐ。



- 公共充電ポートの使用回避

USBポートからウイルスを送り込む「ジュースジャッキング」対策。自分の充電器とコンセントを使いましょう。

✓「ジュースジャッキング」を検索してみよう

２１．クィッシング（QR詐欺）:
偽のQRコードから偽サイトへ。



- クィッシング（QRコード詐欺）への警戒

公共の場に貼られた偽のQRコードをスキャンし、偽サイトへ誘導される被害が増えています。

✓「クイッシング」を検索してみよう

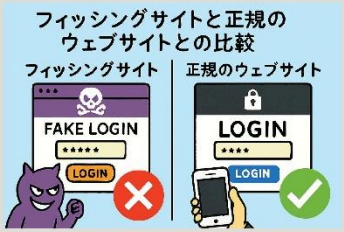
２２．AIボイス・ディープフェイク:
家族を装う合成音声に騙されない。



- AIボイス・ディープフェイク対策

家族の声に似せたAI合成音声での金銭要求が増えています。「合言葉」を決めるなどの自衛が必要です。

２３．フィッシングの無視:
メールやSMSのURLは絶対に踏まない。



- フィッシングメールの無視

銀行や運送会社を装うメールのリンクは踏まず、必ず「公式アプリ」から状況を確認します。

✓「フィッシング」「フィッシングメール」を検索してみよう

２４．SNSの公開範囲制限:
写真一枚から生活圏を特定させない。



- SNSの公開範囲設定

背景の写真から自宅や勤務先が特定されるリスクを避けるため、投稿の公開範囲を絞ります。

✓「SNSの公開範囲設定 」を検索してみよう

カテゴリー６：法規とデータ保護
ICチップやデータのバックアップについて学びます。

２５．ICチップ読み取り:
改正法に合わせた、より安全な本人確認。



- マイナンバーカード等のIC読み取り活用

2026年4月施行の改正法により、厳格な本人確認にはICチップ読み取りが主流となります。偽造書類に騙されない安全な認証を意識しましょう

✓「マイナンバーカード等のIC読み取り活用」を検索してみよう

２６．定期的なバックアップ:
最終的にデータを守る最後の砦



- 定期的なバックアップ

ランサムウェア（身代金ウイルス）や故障でデータがロックされても、復旧できるようにしておきます。

✓「スマホのバックアップ」を検索してみよう



マルウェアについて

- スライド２６の「ランサムウェア」のように現在はコンピュータウィルスを含むいわゆる「悪さ」をする「マルウェア」が存在しています。機会があればそれらを調べてもいいでしょう。しかし専門家ではない私たちがその名前を知ったところで、できることはあまりありません。本教材では私たちが、被害を受けない、被害を最小限に留めるためには、どういうことに留意し、準備し、どう行動すべきかについて学びました。できることから始めていきましょう。

さらに詳しく
情報セキュリティの教材のURL



- 情報セキュリティ教材・ツール

https://www.ipa.go.jp/security/sec-tools/general_security_materials.html

- 映像で知る情報セキュリティ

https://www.ipa.go.jp/security/videos/list.html

IPA（独立行政法人情報処理推進機構）のHPより

本教材の特徴ついて
その１



- この教材は「著作権」を考慮してすべてのイラストと文章の一部は生成AIで作成しています。皆さんも機会があったら「著作権」について調べてみるのもいいでしょう。著作権について知ることも、皆さんを守る「広い意味でのセキュリティ」といえるでしょう。
- お役立ちサイト
  https://www.cric.or.jp/education/eizoushiryou.html
  （公益社団法人著作権情報センター）

本教材の特徴ついて
その２



- この教材は皆さんに多くのキーワードについて、「検索」することを促すように作成しました。
- 教科書は過不足なく説明を記載しています。その説明が皆さんにとって合う、合わないが起こることもあるでしょう。
- 幸いなことに昔と違って、一つのことについて多くの解説サイトや動画があります。皆さんは検索することで自分に合った副教材を見つけることが可能になっており、素晴らしい環境にいるのです。
- ぜひ「検索力」を磨いてください

その指先は世界を変える！
ググってググッてっググりまくろう！



- この教材は、自主学習で使ってもＯＫ。思いついたら検索しよう。

参考：この教材はブラウザで見れますが、スマホでちょっとおもしろい見方もできます。その１

- まず教材をダウンロード

ダウンロードＵＲＬ（仮）

https//yic.ac.jp/ib/xxxxx.pdf

ＱＲコード（仮）

- 次に下記にアクセス

https://online.visual-paradigm.com/ja/flipbook-maker/pdf-to-flipbook-converter/

参考：この教材はブラウザ見れますが、ちょっとおもしろい見方もできます。その２

- こんなサイトに行きます



- さっきダウンロードしたＰＤＦファイルを指定すると本のようにめくれます。ヨコがオススメ。

注意！：ただし、スマホでは大丈夫ですがパソコンではスライドが切れて見えることもあります

